幼児の教育　第115巻　第2号　平成28年4月1日発行　ISSN0289-0836

子ども学の源流を次世代につなぐ

幼児の教育

［特集］保育現場で気になるコトバ考
「安心」とは……？

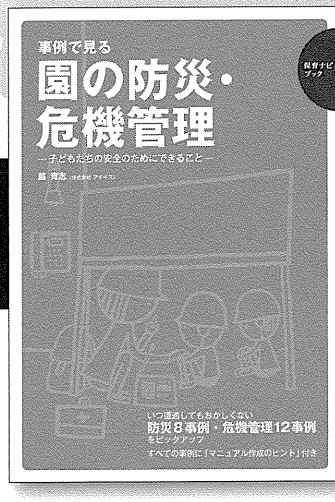
［保育エッセイ］四季の子ども
春という生活

［子ども学探訪］幼児の教育アーカイブズとの対話
ちょうど百年前の『幼児の教育』から

春 2016
since 1901

第115巻　第2号　日本幼稚園協会

地震、大雨などの自然災害や虐待、アレルギーへの対応など、あなたの園のマニュアル作りをしっかりサポート！



保育ナビ ブック

事例で見る 園の防災・危機管理 —子どもたちの安全のためにできること—

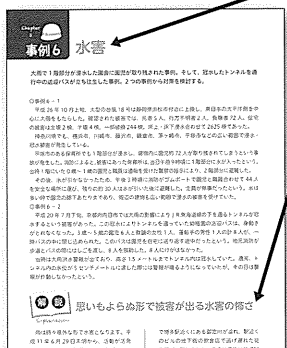
認定こども園・幼稚園・保育園 ——
これからの防災・危機管理のスタンダードがわかる！

脇 貴志／著　定価1,944円(税込)
26×18cm　80ページ
ISBN978-4-577-81388-1

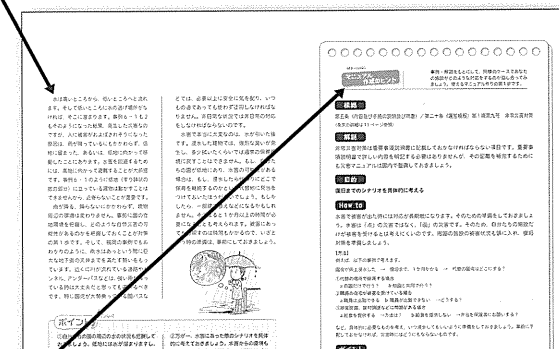
ポイント

「平成26年内閣府令第39号」（「子ども・子育て支援法」に基づく〈特定教育・保育施設及び特定地域型保育事業の運営に関する基準〉）に即した防災や危機管理に対する考え方に準拠しながら、これからの防災・危機管理のスタンダードを確認できます。**事例→解説→マニュアル作成のヒント**と読み進めることで、ケースにあわせた、あなたの園独自のマニュアル作りの道筋がわかります。

事例 防災８事例、危機管理12事例を紹介します。



解説 防災・危機管理コンサルタントの脇氏が、これまでの実務経験を元に、わかりやすく解説します。最後に読み解きのポイントがあります。



マニュアル作成のヒント 事例・解説をもとに、同様のケースで園がどのような対応をするべきか話し合うポイントを紹介します。自園オリジナルの使えるマニュアル作りの第1歩です。

株式会社アイギス 代表取締役　脇 貴志 氏
園向けに、防災・危機管理についてのコンサルティング事業を行う。日興証券株式会社、AIU保険会社、株式会社アスタリスクを経て独立。
2009年に株式会社アイギスを設立。
年間講演数、約130本。事故相談件数、約1,000件。

キンダーブックのフレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所
または本社保育営業部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

お水だよ
たくさん飲んでね

子どもの情景

子ども学の源流を次世代につなぐ
幼児の教育 春2016
第115巻 第2号

写真
子どもの情景 1

目次 まど
安心と春 2

特集
保育現場で気になるコトバ考 9
「安心」とは……? 4
《view 視野》
再考しよう ― 誰にとっての安全? 誰にとっての安心? ― 入江礼子 5
《視点》
子どもが「安心」して遊ぶとき 岩田恵子 9
子どもが「安心」していくとき 三浦未希 13
外で遊んで安心を重ねて大きくなる、ということ 菊地知子 17
《特集memo》 21

実践研究
私の保育ノート
透明に「なる」 杉浦真紀子 22
おばあちゃんの孫育て日誌
今日の〝楽しい〟を見守って 瀧田節子 26

保育エッセイ
四季の子ども ①
春という生活 川田学 30

本棚
古典の散歩道
『幼児の秘密』 ― 集中する子どもの発見 ― 早田由美子 34

目次

表紙の図柄は、お茶の水女子大学附属幼稚園内にあるステンドグラスの模様をデザイン化したものです。

子ども学探訪

幼児の教育アーカイブズとの対話 ④
ちょうど百年前の『幼児の教育』から
―第十六巻第四号（一九一六年四月号）―
構成／結城凛々 39

そこにいる子が子どもであるということ ①
背伸びする赤ちゃんの指さす先には……
浜口順子 43

書評

「雛」の心性 ―『雛の誕生』を読んで
森下みさ子 47

論考

絵本の中で育つ子ども 永倉みゆき 51

論考

保育のクロスロード 保育は素敵な物語 (2)
走り続けるとも君 湯澤美紀 57

子ども学のひろば

イベント・メディア情報・
読者投稿・編集後記 他 63

まど　安心と春

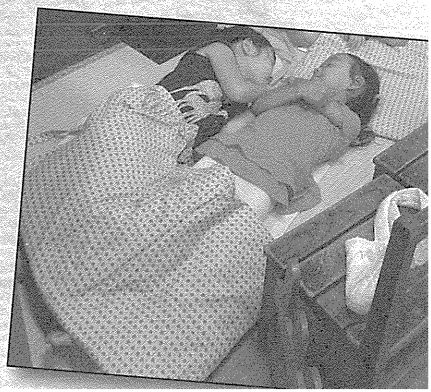
また春号である。『幼児の教育』が季刊となってから五回目の春が巡ってきた（「特集」に、福島の子どもたちのこの間の様子を伝える記事があるのでお読みいただきたい）。

特集テーマは「『安心』とは……？」。「安心」というと、硬く凍っていた土や水が溶解して流れ出すイメージ。かの昔私は、女性でも平均身長が170センチ以上の国で、林の中の灌木のようにしばらく生活していた。帰国して間もない頃、「姿勢が良くなったね」とよく言われた。知らないうちにまた元の猫背に戻ってしまったが、さぞ背筋に力を入れて頑張っていたのだろう。こういう「緩み」の安心はよろしくない。帰国後一番「安心」したのは、話し相手の言葉が100パーセントわかり、自分の気持ちを意のままに伝えられること。この安心感は至福に近かった。しかし今はどうだろう。口の周りに脳があるかのように、話す内容を組み立てずだらだらとおしゃべりしてはお茶を濁すことの多い自分を憂える。「安心」は、その瞬間に意味がある。それだけが持続するとろくなことはなさそうだ。幼児の「安心」は、その瞬間から何かをしたくなり、外界への興味を旺盛にし、何やら行動をし始めるきっかけである。（H）

特集

保育現場で気になるコトバ考9
「安心」とは……？

春を迎え、園では新しい生活の始まり。子どもにはまず安心を確保してやりたいと思うものでしょう。しかし安心して過ごすとは、どういうことなのでしょうか。
まずは安全？
保育者と子どもの信頼関係？
じっくり遊べる環境？
多様な視点から、「安心」とは何か、考えてみましょう。



view
視野

再考しよう― 誰にとっての安全？ 誰にとっての安心？―

入江礼子
（大学教員）

ある日、TH（五歳男児）は、祖母がお月見団子を持ってきてくれたお礼に手紙を書いた。そして、母親に祖母の住所を書いてもらった封筒にその手紙を入れて、入念に封をした。

TH「ぼく、一人でポストに行く」

母「車が通るから、危ないから一緒に行こう？」

TH「ううん。一人で行く！」

その日は日曜日。母親は父親と相談して、一人で行かせる決心をした。

母「気をつけて行くのよ。道路を渡るときは保育園のときと同じように、右、左って見るのよ！」

TH「わかった。〝ぜったいに〟ついて来ないでよ！」と念押しして、彼は靴を履いた。

TH「行ってきまーす」

母「気をつけてねー」。そして、母親はTHに気付かれないように、そーっと遠くから見守った。

THは一生懸命きちんと歩道を歩き、右見て、左見て、道路を渡ってポストに投函。そして投函するや否や、右見て、左見て、を繰り返し、再び道路を渡るや、猛ダッシュで帰路に就いた。母親は渡ったのを見届け、THに見つからないようにすぐさま家に戻って、THを迎えた。

入江礼子（いりえれいこ）
共立女子大学家政学部児童学科教授。子どもは何を考え、何を感じながら生きているのだろう。一生懸命生きていることだけは確かな彼らのそばにいて、その謎を少しでもひもとくのが今の夢です。

TH「ただいま！」
母「おかえり!!」
TH「ぼく、一人でポストに行ってお手紙出した！」
母「ほんと！　お兄さんになったのねえ」

母親はつぶやいた。「私と一緒に歩いているときは、『右見て、左見て』って言っても、言われたままに首を動かすだけだったけれど、一人の今日は違った。真剣に右も左もしっかり見ていた。私が手放すことで、彼なりの『自分の責任』というのを体感したのかなあ」と。

子どもたちが一度は経験する「初めてのお使い」。筒井頼子 作・林明子 絵の『はじめてのおつかい』(福音館書店) をまつまでもなく、子どもにとっての初めてのお使いは新しい自分への脱皮のときでもある。その脱皮のときには、親の側の一歩下がった見守りと、自分の手を放す決意が隠れている。もし、子どもが事故に遭ったら、それは親の責任だ。その責任をとる覚悟のときでもあるのだ。

ところで、目をいったん、保育所・幼稚園・認定こども園などの保育施設（以後、「園」と表記）に移してみよう。今、これらの園では「安全・安心」という言葉が氾濫している。子どもを預ける保護者側も、この「安全・安心」という言葉を園選びのキーワードにしている観もある。預けるのだから、これが必要最小限の条件と思う保護者も多い。また、それだけでいいという切羽詰まった保護者もいるのが現状だ。一方、それらの意識を受けて、と言っては少々オーバーかもしれないが、園側も、まずこの「安全・安心」を表に打ち出す。「お預かりした姿のまま、お返しいたします」という極端な言葉も聞かれるほどに。この意味は、「朝、預か

った子どもの状態のまま、傷一つなく降園時に保護者に返す」ということだ。これは保護者にとっては至極当然のことと思われるかもしれない。大切な子どもを、元あった状態のまま返してもらわなくては、子どもを預けている間中、心配になってしまうからだ。その保護者の要望を文字通り受け入れている例が、保育室等にカメラを付けて、保護者が職場にいても、いつでも子どもの様子を見られるようにしている場合などだ。こうして「安全・安心」という言葉は増殖を繰り返し、わが国の園全体を覆っている観すらある。

でも、ここでちょっと立ち止まって考えてみたい。「安全・安心」は誰のものかということを。今これは、園に子どもを預ける保護者と、その意をくんだ園のものになっているのではないか。そもそも、100％安全ということは、自然界に生きる人間にとってあり得ないことだ。生きるということ自体が死に向かってのリスクをはらんでおり、そのリスクを0にするというのは人間業ではできない。しかし私たちは時としてそれを忘れる。そして、100％安全論に走る。

だが、100％安全論は子どもから成長を奪う。なぜなら、成長を遂げるときには必ずやリスクを伴うからだ。そのリスクを保護者や園もどのように負えるか。これを負う双方の覚悟の程度によって、それぞれの園の「安全・安心」の落としどころが決まってくると言えるだろう。

この100％安全論がまかり通り始めている中でも、前述の園とは正反対の園もある。この園は、園舎を挟んで表と裏に園庭があり、子どもたちはまるで回遊魚のように、この表と裏の園庭を行き来する。その表と裏を結ぶ道、園の垣根と園舎の間の狭い道なのだが、実はこの道、でこぼこがあり、石ころが転がっている。雑草も生えている。入園前の子どもたちは、ほとんどいつも大人の目の届く所で過ごす。転ばぬ先の杖ならぬ親のフォローが入るため、転ぶだけ

の経験もない。この経験不足の故、入園当初は、この狭い道で転んでけがをする子どもが後を絶たない。しかし、一学期もたてば、けが人は激減。一年たてば、ほぼなくなる。

この、けが人が続出するあたりの時期が、園にとっては正念場。もちろん、入園前や入園直後の説明会で、子どもの成長には「うまくいかない経験」や「リスクを伴う経験」が必要なこと、時にはそれはけがを通して学ぶこともあることなどを繰り返し説明する。保育参観を定期的に行い、大人も一緒に遊びながら子どもの体験していることを感じてもらう努力をする。こういう努力の積み重ねがあって、徐々に、保護者と保育者の、子どもの成長にとって必要な経験に対するその年ごとの「落としどころ」が決まる。

一昔前の保育現場であったなら、「これは園の方針」と言って提示すれば済む場合もあった。しかし時代は移り、今は、「園の方針」と「保護者の思い・考え」をすり合わせる場を複数回重ねて、その年ごとの「落としどころ」を確認し合う。決めてもまた新たな事が起こるのが保育の現場。そこですぐに話し合いが行えるようなシステムになっていることが大事なのだと思う。

先に述べた、預かったままの状態で子どもを保護者に返す園では、おそらくこのような、ある意味時間をかけて園と保護者の関係を築くシステムは持っていないのではないか。

子育ても保育も、本当に手間と時間がかかる。今の忙しい時代に、その手間と時間がかけられない現実。それをすべて背負って、親にとって「安全・安心」な園が増えるのも当然の成り行きではある。しかし、そこには子どもにとっての「安全・安心」がない。子どもにとっての「安全・安心」とは、保護者と保育者が確かな信頼関係を築く中、「安全とは言い切れないところに、不安を乗り越えて果敢に挑戦していく」場と時間が保障されることではないのだろうか。

視点1

子どもが「安心」して遊ぶとき

岩田恵子
（大学教員）

モノとの対話

子どもが本当に「安心」して遊んでいるとは、どのようなときでしょうか。

歩き始めて間もないSちゃんは、自宅でお客さんが持ってきた新しいおもちゃに出会いました。そのひもの付いたおもちゃは、引っ張ると動くのです。そのことに気付いたSちゃんは、ひもを持って必死に歩き始めました。少し歩いては振り返り、自分の持っているひもの先におもちゃがあることを確かめています。さらには、腕を前に伸ばして、自分の先におもちゃが行くように試みたり、歩くスピードや距離を変えてみたり、と引っ張り方をさまざまに変えています。いずれもおもちゃから伝わってくる感触が変わるようです。そのように試みているとき、おもちゃがひっくり返って、今までと違う音を立て始めました。その音に気付いてびっくりした顔をして振り返ったSちゃんは、その状態を確かめるようにおもちゃを見ながら引っ張っていました。

また、ある幼稚園にお邪魔したときのことです。園庭で、山のようになった所から水を流して遊んでいる場面がありました。水をくんできては山の上から流すことを繰り返している子がいる一方で、水が流れていく先に注

岩田恵子（いわたけいこ）
玉川大学教育学部教授。子どもたちが仲間と育つプロセスを知りたいと幼稚園に通ううち、保育の場の営みに魅せられて、日々、私自身が学んでいる最中です。

目しているN君がいました。じっと水の流れを見ていたかと思うと、水が流れていきそうな先に溝を掘り始めました。水の流れが来なくなるとしばらく待ち、また水が来ると溝を掘っています。そして、その水の流れが他の流れと合流したとき、N君は、ほっと一安心したような表情を浮かべていました。

「安心」して遊んでいるとき、と言われて、ふと思い浮かんできた二つの場面を描いてみました。年齢も場面も異なりますが、ここには幾つかの共通することがあるように思います。まず、SちゃんもN君も、じっくりと一つのコトに取り組んでいることです。そして、その一つのコトに対して、SちゃんもN君も真摯に働き掛け、その働き掛けによるモノや出来事の変化、モノや出来事が彼らに返してくれることをしっかりと見つめ、その変化に応じてさらに働き掛けています。あたかもさまざまな対話が子どもたちとモノとの間でなされているかのようです。このように、あるモノやコトに夢中になりじっくり取り組む子どもの、モノとの対話、モノの探究の世界を、子どもが「安心」して遊んでいる姿と受けとめることができるように思います。

モノとの対話が広がるとき

このような子どもとモノとの対話が保障され、さらに広がるのは、どのようなときでしょうか。

Sちゃんの場面に戻ってみましょう。Sちゃんのお母さんは、Sちゃんがおもちゃを引っ張ることを楽しみ始めたのを見て、「動くんだね」「Sちゃんについてくるね」など、Sちゃんの動きに応じたモノの変化を描写するような言葉を掛けていました。そこには、Sちゃんとモノとの対話を一緒に味わう世界があったように思います。さらには、Sちゃんが十分にそのモノとの対話を楽しめるように、

障害になる物をさりげなく移したり、広いスペースで楽しめるように廊下へのドアを開けたりして、空間を作り出していました。子どもが安心してモノとの対話を深めるには、共にいる大人もそのモノとの対話を楽しみ、また、そのモノとの対話が続くような空間を作り出すことが伴っているようです。

保育の場では、このような子どもとモノとの対話を、保育者が共に楽しみ、空間を作り出しています。そして、そのようにある子どもと保育者の探究の世界に、他の子どもたちも引きつけられていきます。他の仲間もまたそのモノとの対話を始めるとき、探究の世界が多様に広がり、互いに刺激を受けながら深まっていく実践に出会うことができます。例えば、宇宙に関心を持っている子どもが、保育者と宇宙を表現する活動に熱中していると、他の子どもたちもそれぞれに表現していき、保育室に宇宙空間を作り、共に楽しみます。虫が好きで、虫を捕まえ観察し、それぞれが虫になって遊ぶ子どもたちと共に過ごす中で、虫が苦手だった保育者も虫の世界に魅せられていきます。「安心」して自分なりにモノと対話する世界が保育の場面で広がっていくとき、子どもの学びの世界だけでなく、保育者の学びの世界も共に広がるようです。

モノとの対話が閉ざされるとき

ところが、保育の場面では、このようなモノとの対話が閉ざされてしまうこともあります。それは子どもにとって「安心」できない場面とも言えるでしょう。

男の子が長い筒を持って振り回していました。ふと窓枠に当たるといい音がします。彼は、リズムをとるようにたたき始めました。ところが、そこに通りかかった保育者が「危ないからたたいちゃだめよ」と声を掛け、彼の探究はそこで終わってしまいました。この

場面に見るように、子どもとモノとの対話が保育者に見えていないとき、モノとの対話は閉ざされてしまいます。

また、やはり筒でさまざまな容器をたたいて音の実験をしているように見えた男の子がいて、保育者が「太鼓しようか」と音楽をかけてあげたときも、その子はその太鼓遊びを他の子どもと楽しんではいたものの、最初にあったその子とモノとの対話は閉ざされてしまったように感じました。つまり、子どもがモノとの対話を、安心して自分らしく、じっくり続けるためには、保育者があらかじめ持っている枠組みで捉えるのではなく、保育者も共にそのモノがどのようなものであるかを新たに知る姿勢、未知性に開かれていることが必要であるように思います。

さらに、保育の場では、子どもが熱中できるモノやコトと出会えず、他のことに「安心」を求めざるを得ない場面もあります。例えば、保育者がやってほしいと思っていることを、子どもが敏感に感じとり、そのように振る舞い、保育者に良い子と受け入れてもらいたいことが最優先になってしまうとき。友達に受け入れてもらうために、自分が望まないことでも、友達が要求するように同じことをしようとするとき。このような、他者が望むことに合わせることで安心しようとする子どもの姿は、他者に受け入れられて何とか安心したい不安の裏返しでもあると捉えられます。

本当に「安心」して遊ぶこと。それは、子ども自らが、他者の評価枠にとらわれず、自分らしくモノと対話できること、そして、その自分らしさが、他の人とのかかわりにも活かされ、互いに活かし合うことができるかかわりに広がっていくことなのだと思います。その「安心」には、子どもとかかわる大人もまた自分らしく、子どもを尊重して共に探究する世界が伴っているように感じる最近です。

視点2

子どもが「安心」していくとき

三浦未希
（幼稚園教諭）

当たり前のように使う「安心」という言葉。改めて意味を考えてみたことがなかったなと思い、辞書を引いてみました。

「安心『気にかかることがなく心が落ち着いていること。また、そのさま。』」

似ている言葉に「安全」がありますが、「安全」がどちらかというと身体的なことを指すのに対し、「安心」は字の通り、心の状態を指しています。幼稚園で子どもたちと過ごしていると、身体的な安全が守られていることはもちろんですが、子どもの心が健やかでいられることの大切さを日々感じます。子どもたちの心が、不安や心配ではなく、楽しみなことやうれしいことで満たされ、安心して今を生きているとき、その生き生きした表情や真剣に遊び込む姿、輝く笑顔からは、子どもたちが自ら育っていこうとする力強さを感じます。

私は、幼稚園に勤務して五年目の保育者です。これまで、「安心」ということは、大事ではあるけれど、どこか当たり前のことと思っていて、深く考えたことがありませんでした。そこで今回、「安心」について、私がこれまでかかわった子どもたちとのエピソードの中から改めて考えてみたいと思います。

三浦未希（みうらみき）
私立大学幼稚部教諭。

年中からの新入園児のAちゃんは、入園当初から緊張感が高く、幼稚園に来ると立ちすくんでしまい、まったく動けずにいました。当時私は隣のクラスの担任をしていたので、担任の先生が、自分からは動けずにいるAちゃんの手を優しく引いて一緒に過ごしている様子や、不安げなAちゃんのことを心配しながらも、Aちゃんの前ではそのようなそぶりを見せず、いつも穏やかな笑顔で一緒にいる様子をよく見かけていました。そして、Aちゃんが自分の意思を少しずつ表現できるようになったこと、安心できる友達との間では笑顔で過ごす時間が増えてきたことなどを見たり聞いたりし、Aちゃんが少しずつ自分から変わっていく様子を頼もしく思っていました。

年長からAちゃんの担任になった私は、進級当初、新しい友達や環境に戸惑い、やはり動けなくなってしまったAちゃんの傍らにいて、心配な気持ちもありましたが、ある時、「Aちゃんは自分から動きだすときを待っているのだな」と感じることがありました。進級して間もないある日、Aちゃんは、朝、登園すると、着替えることもなくロッカーの前で立ちすくんでいました。私が、着替えると気持ちが変わるかなと思い、「Aちゃん、着替え、手伝おうか?」と声を掛けながら近寄ると、Aちゃんは、立ち尽くしながらも、目はしっかりと年中組の時に仲良しだった子がしていることを追い、近くで友達が笑いながら話していることをこっそり聞きながら、時折顔をほころばせているのでした。私はそれを見て、Aちゃんはまだ体は動きだしていないけれども、心や気持ちは動いていること、もう少しすると、自然と体も動きだしていくのではないかということを感じ、昨年のAちゃんや担任の保育者の姿を思い出しながら、私もAちゃんが自ら動きだすのを見守りながら待つことにしました。その後も、周囲をじっ

くり見ながら新しいクラスを自分で受け入れていったAちゃん。いつの間にか、心だけでなく、体も自ら動きだし、仲の良い友達と一緒に園中を駆け回るようになっていました。

私は、Aちゃんとのかかわりを通して、子どもたちが新しい場所に慣れ、自分から動きだせるようになっていく過程や、それまでにかかる時間は一人ひとり違うこと、傍らにいる保育者が、子どもが自分から動きだすのを焦らずに待つことが大事なのだということを、改めて感じさせられました。

年長児のBちゃんは、五月の連休明け頃から、いろいろな方法で、私の思いを確認するようになりました。毎朝、登園する時に、私が見ているのを確認してから、わざと隣のクラスの入り口（保育室内はつながっている）から保育室に入ってきて、私の目を見つめながら「〇〇先生（年中組の時の先生で、隣のクラスを担任している）のほうが好きだから、あっちのドアから入ってきたんだよ。私も隣のクラスがよかったな」と言うのです。私は担任として少し動揺する部分もありましたが、落ち着いて見えるBちゃんが本当は初めての進級にとても緊張していること、周囲の状況がよく見えるBちゃんが、クラスが落ち着いてきたのを確認してからそれを表現していること、Bちゃんが本心で言っているのではなく、私に答えてほしいだけなのだということ……が伝わってきていましたので、「先生は、Bちゃんがオレンジ組でよかったな～」などと私の思いを毎回伝えることにしていました。その返事を聞くと安心したように朝の身支度に向かうBちゃんとのやりとりを、三週間くらい続けたでしょうか。ある朝、仲良しの友達と一緒にバスから降りてきたBちゃんが（その頃、先生を「せんべい」と呼ぶのがはやっていた）、私のところに来て、「Bね、塩

せんべいが大好きなんだよ。だから未希せんべいも大好き。あと、オレンジ味の歯磨き粉を持ってるから、オレンジ組も好きだよ」と、思い切ったように、満開の笑顔で言ってくれました。「せんべい」「歯磨き粉」の力を借りて精いっぱい表現してくれたのが照れ屋のBちゃんらしくて、とてもうれしかったのを覚えています。

Bちゃんだけでなく、子どもはあえて傷つけるようなことを言って、相手を試してみることがあります。でも、そのようなかかわりの中で、子どもたちは〝いい子でない自分〟も丸ごと受け入れてもらえる場なのかどうかということを確かめながら、自分で安心感を獲得していっているのだと思います。

最後に、私が今回「安心」ということを考えている際にいつも思い出していた、倉橋惣三著『育ての心』（フレーベル館）の中の一節があります。引用させていただきます。

小さき太陽

よろこびの人は、子どもらのための小さき太陽である。明るさを頒ち、温かみを伝え、生命を力づけ、生長を育てる。見よ、その傍に立つ子どもらの顔の、熙々として輝き映ゆるを。なごやかなる生の幸福感を受け充ち溢れているを。（中略）

希わくは、子どもらのために小さき太陽たらんことを。

子どもたちが安心して、自分らしく生活できるとき、その傍らには共に喜びを分かち合う、〝小さき太陽〟があるのだと思います。私も、子どもたちにとって〝小さき太陽〟となれるよう、これからも保育者として、精進していきたいと思います。

視点3

外で遊んで安心を重ねて大きくなる、ということ

菊地知子
（保育士）

二〇一六年のこの春、二〇一〇年四月に小学校に入学した子どもたちが、卒業を迎える。その子たちは、もうすぐ二年生になり新一年生が仲間入りする、というれしい春三月に、東日本大震災、原発事故に遭っている。福島市のS君もそんな一人。四月からは中学生だ。

S君は、小学校入学と同時に、M学童クラブに入所した。学童一年目、春夏秋冬の毎日を、すぐそこにある田んぼや畦道や牧草地で遊んで遊んで遊び尽くして過ごしたS君の、震災前と二〇一一年以降五年間の学童クラブでの外遊びの軌跡を追っていきたい。なお、本稿は、福島市に住む大澤由記さん（S君とその二人の弟のお父さん）にお借りした記録や学童クラブのおたよりなどを基に、菊地が構成したものである。

学童一年目の夏休み ― 大澤氏の記録から

外で一日中ザリガニ、タモロコ、虫捕り。お迎えに行っても学童（クラブ）は閉まっていて誰もいない。しばらく待っていると、目の前の田んぼから虫捕り網を手に、泥だらけの子どもたちが帰ってくる。Yさん（学童クラブ舎の大家さんで、同じ敷地内のご自宅に住んでいる）手作りの砂場、かつては家畜の放牧場であった裏の原っぱが彼らの遊び場。

菊地知子（きくちともこ）
お茶の水女子大学附属いずみナーサリー主任保育士。
お茶の水女子大学人間発達科学研究所研究協力員。

震災後二年間の記憶 ― 大澤氏の記録から

当時、保護者会会長をしていた（下の子たちの）保育園で精いっぱい。学童の記憶がほとんどない。Sの姿で心に残っているのは、毎日一人で学校に行くランドセル姿[注1]、ホールボディカウンター検査の前日の夜の言葉[注2]。学童で印象的だったのは骨折事故の多発、行政ではなく大家さんの厚意による扇風機設置。しかし、窓を閉め切った部屋では熱風を感じるだけだったようだ。

二〇一一～二〇一四年の学童の外遊び

◇二〇一一年

四月おたよりから：原発事故の影響で外遊びができず、子どもたちのストレスもたまり、落ち着かない日々が続いています。学童としては室内遊びを充実させて対応していきたいと考えています。学童では外遊びは中止しています。今後は各小学校の対応に準じたいという考えです。

六月おたよりから：建物周辺に水をまいたり、カーテンを付けたり、植物を育てたり、放射線量やその影響を減らす努力をしています。／毎週金曜日に外遊び（10～15分）をするので、外遊びをさせてもよい場合は、長袖・長ズボン着用、帽子を持たせてください。尚、雨が降った場合は外遊びはしません。

◇二〇一二年

六月四日の地域懇談会報告書から：週1回の外遊びを子どもたちは非常に楽しみにしています。学童では毎週水曜日に放射線量を計測。線量は徐々にですが下がりつつあるので、外遊びをもう1回（増やす提案を保護者にしたところ、週1回15分から）、週2回20分行うことにしました。尚、今後も高圧洗浄をする予定。

六月おたよりから：水・金曜日はみんな「今日、外遊びできるよね」と言って目をきらきらさせながら帰ってきます。上級生たちも「まだ宿題終わってないけど、外遊びしてからやる」と言って、20分だけ思いっきり外で遊んでいます。

外で遊んだ後は、いつもより落ち着いて行動できているように感じます。走っている姿を見ていると、やっぱり外遊びというのはすごいエネルギーを子どもに与えてくれるものだ！　と感じます。

九月おたよりから：（夏休み中は、保護者に承諾してもらい、外遊びを1時間にしていたが）学校が始まったら週2回、しかも20分だけでは嫌だ！　という声が多く、皆で話し合いをして、「毎日30分外遊び」ということに決まりました。

◇二〇一三年（注3）

六月おたよりから：H小の三、四年生は学校帰りの道草が楽しいようで、ゆっくり遊びながら帰ってくることが多かったのですが、お父さんお母さんが（放射線の影響を）心配していることを伝えて話し合いをして（中略）週2回の道草はOKということにしました。道草から帰ってきた後は靴底を洗ったり、手洗いうがいをするなどの対策はしっかりしていきます。

十月おたよりから：九月に入ってから、今まで30分だった外遊びの時間を40分にしました。10分延びただけなのに、子どもたちは「やった～！」と大喜びでした。

◇二〇一四年

二月おたよりから：久々の雪で子どもたちも大喜びです。待望の原っぱでの雪遊びを楽しんでいます。

十二月おたよりから：事故後三年八か月ぶりに牧草地で遊びました。今まであまり外に出て行かなかった子どもも喜んで行くようになりました。手洗いうがいの約束はみんな守っています。土曜日には秘密基地作りもしました。遊んだ後に、いつもサッカーをする蔵の前を通ったとき、「この場所ってこんなに狭かったっけ？」と感じるほど牧草地は広いです。

見守り続けてくれる人 ― 大澤氏の記録から

（二〇一五年、二〇一六年の冬）子どもたちは

三時半から四時半まで外で遊んでいるという。子どもたちがしたい遊びに必要とおぼしきテニスネット、バスケットゴールなどを、大家のYさんは手作りしてくれた。子どもたちを大切に見守り続けてくれる人がいることを切に感じる。

・・・・・・

S君らの学童クラブでの生活は、時間的空間的に限られた「外遊びの時間」なるものが存在しないほど、かつては外遊びで占められていた。すぐそこにある土や水や風、陽の光への呼応、あるいはそれらとの対話の中でこそ子どもたちは自らの生活をその人らしく生きることへの安心感を蓄えてきた。

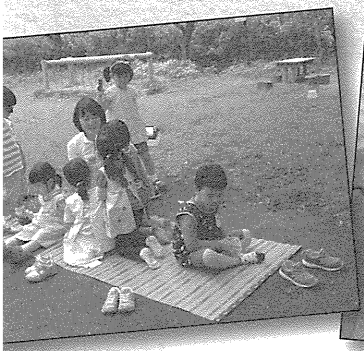
S君は小学校卒業とともに学童クラブでの生活を終えるが、S君らのここまでの思い・葛藤や切なさが、忘れ去られることがあってはならないと思う。同時に、「僕たちは外で遊びたいんだ」「外で遊んで大きくなりたいんだ」という〝当たり前の願い〟とそれを〝聞かせてほしいと願われる経験〟とが下級生たちに引き継がれ、「うん、大丈夫」という実感＝安心をしっかりと重ねて大きくなっていってほしい。そして私たちは、子どもたちの笑い声、仲間を呼び合う声が野に山に響き渡るために、子どもたちの思いを、聞かせてほしいと願い続けなければ、と改めて思う。

注

1 当時、S君以外の多くの子どもたちが、保護者の車で登下校するようになった。

2 検査前夜、S君が「俺は（数値が高く）出ると思う。草むらに入っちゃったから……」と漏らしたという。普段そんなことを気にしているそぶりもなく屈託なく遊んでいるように見えた彼の心の奥の思いに、親の胸は痛む。

3 この年の四月から翌年三月まで、菊地はM学童クラブに月1～2回遊びに行っていた。事故前の学童クラブでの生活を知るS君ら新四年生二人がここを巣立つ前に、私たちが共有させてもらっておくべきことがあると強く感じたためだ。



特集 memo

この春号の特集は、園生活の「春」に最も際立つ問題、「安心」を取り上げた。もちろん、春に限らず、子どもの生活において、安心して過ごすことはいつも求められていることである。しかし、日本は春に新学期を迎えるという生活スタイルを持ち、大人にとっても子どもにとっても、安心した環境を共に手探りする特別な時期として「春」があるとも言える。

《視点》の三つの論文を読むと、保育における「安心」という言葉の捉えも、三者三様だ。岩田氏は「安心して遊ぶ」ことについて書かれ、子どもがじっくりとモノと対話して遊べる「安心」、そしてそれを支えるために「保育者も共にそのモノがどのようなものであるかを新たに知る姿勢、未知性に開かれている」ことが重要であると言われる。三浦氏は、春の進級時に「安心」の手前で子ども自身が揺れながら、その子どもらしく表現したり動きだしたりするのを温かく見守っている。菊地氏は、福島市の保護者の記録を紹介しながら、当たり前に外で遊べるということが、汚染されていない環境への「安心」を前提としていることに気付かせてくれる。福島の子どもの「外遊びしたい」という言葉は、人間の叫びなのである。体内線量の測定をする前夜に、「草むらに入っちゃったから」高く出るかも、と親につぶやいた小学生S君。それを聞く大人（親）の気持ちはいかほどにつらいだろう。

一方で、親の身勝手な「安心」のために子どもの「安全」を主張する風潮がある。《ｖｉｅｗ》の入江氏は鋭く警告を発してくださった。（H）

実践研究
私の保育ノート

透明に「なる」

杉浦真紀子
（幼稚園教諭）

日頃、保育をしていると、子どもが何かになりきって遊んでいる姿をよく見かける。ままごとのお父さんやお母さんになって大人っぽく振る舞ってみる、「アナと雪の女王」のエルサになって情感豊かに歌う、ウルトラマンになって怪獣とおぼしき相手に立ち向かう……などなど。自分の好きな人や憧れのキャラクターになりきっているときの子どもは、なんて生き生きとしているのだろう。まるで、自信たっぷりにその役柄を生きているようでもある。子どもたちは、何かに「なる」ことで、なりたい自分に一歩一歩近づいているのかもしれない。しかし一方で、なりたいと強く願っているわけではないのに、そう「ならざるを得ない」こともあるのだということを考えさせられる出来事があった。

四月、年少から年中へと進級したS子。私は三月に年長児を卒園させたところで、新年度からはS子のいる年中クラスの担任となった。S子の元担任は同学年の隣のクラスへと持ち上がり、私としてはとても心強く感じていた。

S子は登園すると、隣のクラスのH夫と、

杉浦真紀子（すぎうらまきこ）
お茶の水女子大学附属幼稚園教諭。

どちらからともなく互いの姿を探しては一緒に過ごすことが多かった。昨年は同じクラスでとても仲が良かったと聞いていたので、クラスが離れてしまって心細いのだろうと受けとめていた。しかし、常に二人きりというわけでもなく、時には他の女児のままごとに加わって遊んでいたし、特に何かが困ったといって担任を頼ることもなかったので、しばらく様子を見守るつもりでいた。ただ、降園前の集まりのときだけは、「先生の隣がいい」と言ってひざの上に座ったり、触れ合いを求めたりしてきたので、そんなときは大切にかかわろうと考えていた。

五月、生活や遊びの様子が少し落ち着いてきた頃、隣のクラスの担任と、子どもたちの様子について話をしていた。そこでS子について、こんな話題が上がった。「S子とH夫が不安げに寄り添って過ごしているようで気になる。担任として何とかかかわっていきたい」と。私自身、気になりつつも踏み込んでかかわれずにいたことに、はっとさせられた。そして、S子とH夫は一体どんな思いで過ごしてきたのだろうと、今度は胸がどきどきして、居ても立ってもいられなくなった。

その翌日のことである。園庭に出てみると、S子とH夫の二人が、丸太に座ってひそひそと話をしている。一見、ひっそりとしているようだけれど、庭のど真ん中に座っていて、まるで、こちらからの働き掛けを待っているかのようにも感じられた。そこで、思い切って声を掛けてみる。

「何してるの？」

「いいから！　私たち、透明になってるってことだから、見えてないってことなの」

「ごめん、気がつかなくて。透明になってるってことが、わかるとよかったんだけど」

S子の言葉からは「私たちのことは、そっとしておいて」という意味合いが感じられたが、私としても、S子とつながるチャンスを逃すわけにはいかなかった。

「透明になれる方法があるかもしれないから、一緒にやってみようよ！」

この言葉に二人の表情が少し変わったことが見てとれた。そこで一緒に保育室に戻り、製作用の机に向かったが、混み合っていたので、そばにままごと用の机と椅子を運んできて、二人のための特等席を作った。二人はとてもうれしそうな様子で、これから何が始まるのかと、気分が盛り上がってきたようだった。

「透明」という言葉から連想し、まずはビニール袋を目の前でひらひらさせてみた。

「わぁ、ほんとに透明！」

喜んだS子は、それを頭からかぶろうとする。

「息ができなくなりそうね」

「じゃあ、切ったら？」

「これくらい？」

「顔が隠れるくらい」

「お面みたいにしたらどう？」

などと話し合いながら、最終的には（紙製の）お面のベルトに透明なビニールを付けただけの、シンプルなものができあがった。そして相談の末、ビニールが顔にかかっているとき

は透明になっているということ、ビニールが上に上がっているときは透明じゃない、つまり姿が見える、ということになった。S子がビニールを上げたり下げたりするたびに、

「あれ、Sちゃんがいなくなった！」

「あ、いつの間にか出てきた！」

とやりとりをしていると、その様子を見ていた友達が、同じ物を作りたいとやって来た。

「こうやって作るんだよ！」

と、S子は友達にそのお面を見せてあげると、勢いよく園庭へと飛び出していった。

環境が大きく変化する中で、不安に揺らぐ自分を保つために「透明」にならざるを得なかったS子。しかし、お面を作ったり試したりしながら、透明になるということが楽しさへと変わっていったとき、S子の体は安心感を得て、思わず動きだしたのではないだろうか。

子どもは、何かに「なる」ことで、自分の不安や危機的な状況を表すこともあるのだと、改めて気付かされる。そんな子どもたちの心の在りようを受けとめ、一人ひとりが安心して自分らしさが発揮できるよう、支えていけたらと思っている。

実践研究

おばあちゃんの孫育て日誌

今日の〝楽しい〟を見守って

瀧田節子
（大学教員）

還暦とは、六十年で干支が一回りして再び生まれた年の干支に還（かえ）り、元の暦に戻ることをいいますが、初孫のK（女児）とは、六十歳の年の差で同じ干支。そして二歳下に妹Nが誕生。それから八年を経て、姉妹は小学二年生と一年生。

この原稿の締め切り後の十二月には赤ちゃんが家族に加わり、二〇一六年の春は六人家族。おばあちゃんの私は、三人の孫たちの何気ない日常を思い返しながら、感じたことを四回にわたりお伝えしたいと思います。

春は砂で温泉？

四月半ばの暖かい日のこと、間もなく二歳になる孫Kと、家の近くの公園の砂場で遊びました。下の孫（妹）Nが生まれたばかりだったので、Kの外遊びは、ばあばのお役目。

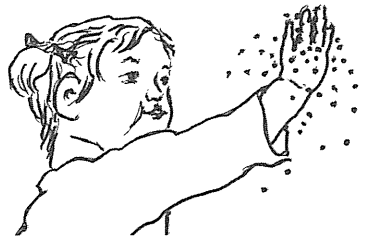
砂場に入ると、Kはまるで砂の温泉にいるように体中を砂に預け、両手に砂を握っては開くことを繰り返し、指からはらはらとこぼれる砂の行方を飽きずに眺めたのでした。さらさらの砂がよほど気持ち良かったのか、顔見知りの一歳五か月のお友達と、砂まみれで

瀧田節子（たきたせつこ）
専門：造形表現教育。東京都の図画工作専科教諭を長く務める。筑波大学附属小学校教諭、お茶の水女子大学附属小学校講師を経て、現在は東洋大学、関東学院大学、清和大学短期大学部で非常勤講師を務めている。

たっぷり遊びました。

昼近くなり、イチゴでもトマトでも帰ると言わず、「クッキー食べよう」と言うと、やっと帰る気に。帰り道はタンポポの種を飛ばしたり、葉っぱを食べたり、たっぷり一時間。帰ったらすぐにお風呂で、大満足の一日。

孫の遊ぶ様子を見ながら思い出すのは、娘の幼い頃の姿。砂をつかんで天に差し出し、拳を見つめるしぐさがそのまま重なります。孫の遊びと向き合い、幼い命を見守る幸せを感じながら、自分の生が二倍にも三倍にもなるかのように思います。そういえば、このような砂をいじる「感覚遊び」について、小児科医 北畠道之氏は、「（自然の中の）『地水火風』が幼児にとっての何よりのテーマであるべきだ。」「『砂』は形相（有事即応力）」と著書『新しい母の本』（朝日新聞社）で述べていたことを思い出し、読み返しました。



一歳のガラス絵のこと

幼児と絵の具の出会いです。[注]

二〇〇八年、お茶の水女子大学附属いずみナーサリーで、大きな窓ガラスへのペインティング活動を参観したことから、早速ナーサリーで教えてもらったスポンジタンポ（スポンジをストッキングで包んで、フィルムケースに差し込んだもの）を作り、何でもやりたがる時期となったKと、自宅のベランダのガラス戸で遊びました。

それは九月のある日のこと。ばあばをまねて、始めは恐る恐る手を伸ばしたKでしたが、

一度「ポン」と色をガラスに付けるや、すぐにキャーキャーと声を上げ、体を揺すって喜び、熱中したのでした。色を「ポン」とガラスに付けてはそのガラスをじっと眺め、また腕を伸ばし、色を付けることを繰り返す一歳四か月児の様子に、何を考えているのかな？と思ったものです。

十一月、一歳六か月になったKは、ガラス絵遊びをしているうちに、筆拭きタオルに絵の具の色が付いていくことに興味を持ち、タオルがキャンバスになった、絵の具を染み込ませる遊びを熱心に始めました。タオルを折り替え、裏面に染み出る色も確かめながら、ポンポンと筆を押し付けて遊びました。

この日、Kは、ママと絵の具で遊び始めました。黄色の絵筆に赤色が混じって付いた筆を、そばにいたママはタオルで拭いました。この後Kはママをまねて絵筆をタオルで拭き、白いタオルに付いた色を新たな気持ちで見たのだと思います。新しい表現の方法を見つけたKは、ママがばあばと交代してキッチンに行った後も、満足するまで描き遊びました。やがて、Kはタオルに目を落としたまま立ち上がり、タオルを食卓に広げて眺めた後、タオルを手にすると、キッチンのママに見せにいきました。大好きなママと一緒にうれしい気持ちを味わいたかったのでしょう。

この出来事から、一歳児は自身の中にすでに、表現・発見・鑑賞・共有のサイクルを持っているのかもしれない、と心に刻みました。

その後、ガラス絵は姉妹の夏のお楽しみになり、幼稚園のお友達も加わって、お絵描き遊びを楽しんでいます。

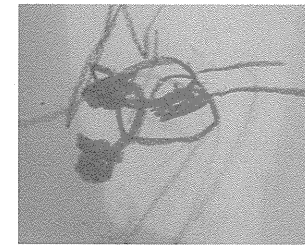
▲二人で遊ぶガラス絵（Ｋ４歳、Ｎ２歳）

「ばあば、おみやげよ！」

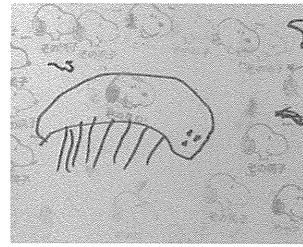
小さい頃から、小学生になった今も、孫たちは毎日のように、道端や家の周りで、ネコジャラシやタンポポ、木の葉や小石や小枝を拾い、意気揚々と家に帰ってきます。そして、大きな声で「ばあば、おみやげよ！」。集めることが面白いのでしょうね。多くは玄関に放置されたままになるので、わが家には枯れ葉や手頃な枝木がゴロゴロ。性差の研究者、皆本二三江先生は、このような幼児期の女の子たちの採集遊びについて、「彼女たちの祖先の生活を追体験しているのではないかと思う」と著書『絵が語る男女の性差』（東京書籍）で述べ、女の子が描く花や木や果実などをモチーフにした楽園の絵と関連しているのではないかといいます。そういえばわが家のKもNも、花や草木を夢中になって描きます。

それから、小さい生き物も、よく描きますね。Kが、毎日のようにかがみ込んで見続けた「ありさん」を、緑色クレヨンで初めて描いたのは二歳半の頃。妹のNが二歳半になって鉛筆で描いたのは、大好きな「ダンゴムシ」。一年生になっても夏になると飼育かごで大事に育てています。

―続く―



▲「ありさん」（K２歳５か月）



▲「ダンゴムシ」（N２歳５か月）

注

瀧田節子「一～二歳児のガラス絵から、からだを喜ばせて表す子どもの姿に学ぶ」『幼児の教育』第一〇八巻第十一号 P58～63に詳しく掲載。

保育エッセイ

四季の子ども①
春という生活

川田 学
（大学教員）

季節の子

ヘンリー・デイヴィッド・ソローの『森の生活』[注1]は、春で終わる。森の生活、という憧れのような響きなのに、目次が「経済」から始まったりして、お世辞にも読みやすい本ではない。けれど、長い思索の後に春で終わる構成が、なかなかにくい。

四回のエッセイを依頼されて、すぐに思いついたのは四季だった。子どもと四季、子どもの四季、といろいろ考えてみたが、結局「四季の子ども」とした。なんとなく、四季が先で、子どもが後だと思ったからだ。子どもと暮らしていると、われわれが四季の中で生きていることを実感する。四季の中に生きる子どもについて、考えてみたいと思った。

私の専門は、発達心理学である。専攻しているのだから、意義を認めているし、人間の発達を研究することの奥深さをいつも感じている。でも、あまり季節感のない思考方法だとも思う。科学なのだから当然との向きもあるだろうが、本当にそうだろうか。なぜ、動物や植物の成長研究と季節は切り離せないのに、人間では無視できるのだろうか。

川田　学（かわたまなぶ）
北海道大学准教授。専門は発達心理学。子どもの見方を柔らかくする発達研究を模索中。著書：『0123 発達と保育』（ミネルヴァ書房）ほか。

子どもとの生活、子どもの振る舞い、子どもが変わっていくとき、これらは季節と無関係に起こっているのか。こんなに近代化しても、私たちの生活は季節のリズムと調和しようとする。子どももまた、季節の子なのではないか。そんなことを背景に置いて、あれこれ考えてみたい。

子も萌える

さて、春である。

関東から西では、二月も末になると、日中の気温が二ケタに届き、身も心も軽くなる。園庭や散歩の子どもたちの声も弾んでくる。日差しや湿度や若芽の色なかに、春を感じる。三寒四温の陽は確実に大地を暖めて、子どもをうきうきさせる。気温の上昇は、子どもの遊び世界の広がりのキエチーフ[注2]（静機）である。北国では、ちょっと事情が違う。私の住む札幌辺りでは、春の兆しは三月あたりから認められる。ただ、悩ましいのは、気温の上昇が、ぐちゃぐちゃの地面を作ることだ。夜には氷点下になり、翌朝、すさまじい造形のカチカチ地面が現れる。歩くのにも神経を使う。氷点下10度の銀世界のほうがはるかに遊びやすい。雪国では、このジレンマに二か月ほどさらされて、やっと五月の連休あたりから本格的な春を迎えることになる。

梅と桜が一緒に咲き、草花が一斉に成長し始める。その勢いたるや、関東育ちの私には驚き以外の何物でもない。これが〝萌える〟ということなのかと、最初の春に至極納得したものだった。植物と同じように、東京の二か月遅れくらいで、子どもたちの心身が躍動し始める。五月に全国一斉で体力測定をしているけれど、「四季の子ども」論からすると、あれはいかにもナンセンスではないか。

札幌近郊のある幼稚園では、一年間を六季に分けて年間教育計画を立てることにした。春夏秋冬の間に、初夏と初冬を挟んだのである。園庭以外に森での活動を取り入れたこともあり、六季で計画を立てたほうが自然をより繊細に感じ取れるというねらいがあるようだ。北国の保育者らしい感性を思う。厳しい冬にどうしても籠もりがちになるのだから、その入り口である初冬をどう暮らすか、そして、夏が来るとすぐに秋になってしまうのだからその前を初夏として切り出して、どのように保育の充実と結び付けていくか。まさに、「四季の子ども」へのアプローチだと思う。

別れと出会い、あるいは「逆スイミー」

春は、別れと出会いの季節でもある。でも、この感性は、自然と文化の歴史的な複合体であろう。私たち日本人は、もう長い間、春は別れの儀式と出会いの儀式で節目を刻んできた。春という響きには、うきうきした期待感と共に、どこか惜別感も伴っている。そういう感性は、いつ頃どのように子どもがまとうようになるのだろう。幼児は、卒園式での別れの悲しみと、入学式での晴れ晴れした気持ちを、それぞれ別のものとしてではなく、一つの春の感情としてつかまえるだろうか。

少なくとも、遠い日の私にはそんな感情的複合体は宿っていなかったようだ。保育園の卒園式の記憶は皆無である。私は四月生まれなので、卒園の時はもう七歳に近かった。でも、なーんにも覚えていない。先生方には正直、申し訳ない気持ちである。一方で、小学校の入学式はいろいろな記憶が残っている。ベビーブームで全校児童二千人近く、第一学年は四十五人の七クラスだ

った。急ごしらえのプレハブ教室に押し込まれて、廊下はベニヤ板で子どもが走り回るとぐわんぐわんと波を打った。

若い両親の合理主義が、私の入学式を彩っている。二つ下に妹がいるので、その子の入学式でも着られるようにと、真っ赤なブレザーを買ったのだ。クラスの誰よりも多動だった私は、金魚のようなブレザーを着て、大いに目立った。子どもにも派手だとわかる金魚ブレザーに、服にまったく関心のなかった私も少しためらった記憶がある。

式の記憶はない。式後のクラスごとの写真撮影の記憶が、アルバムを繰り返しめくりながら母が面白おかしく話したエピソードと共にある。私のクラスは、落ち着きのない私とうめちゃん（後で仲良しになる）のせいで、何回も撮り直しになった。紺ブレ（ザー）だったうめちゃんはまだいい。私は「金魚」だったのだ。紺の集団の中、たった一人の真っ赤っか。レオ・レオニ作『スイミー』の逆バージョンである。気が気でない母の耳に、保護者席からひそひそ話が聞こえてきた。「ああいう子に限って、赤、着せるのよね……」。

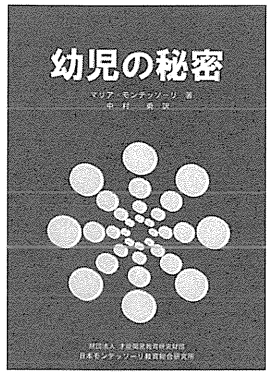
私の春の感情生活はこうして始まった。ソローの『森の生活』のように高尚ではないが、確かに今の自己を構成する一部である。

注

1　H・D・ソロー『森の生活（上・下）』飯田実 訳　岩波書店　一九九五年

2　キエチーフ（quietiv）とは、文芸用語で主題（モチーフ、動機）を潜在的に支える契機を意味する。〝静機〟という訳語は、作家・開高健（一九三〇-一九八九）の訳出らしいが定かではない。開高の例でいうと、「イルカ」をモチーフとした絵を描くとき、そのキエチーフは「海」、となる。

本棚の古典散歩道



『幼児の秘密』マリア・モンテッソーリ著
中村勇 訳 （日本モンテッソーリ教育綜合研究所 2004年）

『幼児の秘密』
－ 集中する子どもの発見 －

評者 早田由美子
（大学教員）

モンテッソーリ教育の広がりと子どもの発見

マリア・モンテッソーリは明治維新の二年後の一八七〇年に、イタリアのアドリア海に面するアンコーナという地方都市に生まれた。

日本でも、第二次世界大戦が終わるまで、一部の大学（二〇一五年NHK朝のドラマ「あさが来た」で描かれた日本女子大学など）を除き、女性が大学で学ぶことはできなかったが、イタリアでも男女差別は激しく、大学の壁は厚かった。それでも医学を志したかったモンテッソーリは、交渉の末、ローマ大学医学部に女性として初めて入学し、医師となった。一八九六年のことである。

医学生の時から障害児の治療と教育に携わり、その実績を生かしてスラムの子どもの保育を行い大きな成果を上げ、八十二年間の生涯で数多くの業績を残す。子どもに関する本もたくさん刊行している。その本は何か国

早田由美子（はやたゆみこ）
千里金蘭大学生活科学部児童学科教授。学術博士。専門：保育学、保育思想。著書：『モンテッソーリ教育思想の形成過程－「知的生命」の援助をめぐって－』（勁草書房）他。

語にも翻訳され、今日もなお読み継がれているだけでなく、世界一一七か国二万二〇〇〇の園・学校で彼女の思想と方法に基づいた実践が行われている。園・学校というのは、保育園、幼稚園を中心に、小学校、中学校、高等学校でも実践が行われており、それらを合わせた数である。日本で六〇〇～一〇〇〇箇所あるといわれているモンテッソーリ園のほとんどが幼児教育の場での導入であるが、世界での広がりは幼児教育の分野にとどまらないのである。インドには世界で最も生徒数が多い「シティ・モンテッソーリ・スクール」がある。生徒数はなんと約四万五〇〇〇人とのこと！

一九一七年、ローマに最初に設置された保育施設「子どもの家」は、来年、開設一一〇周年を迎える。世界における広がりと長年にわたる高い関心の継続の理由は何であろうか。その最も大きな理由は、彼女が発見した子どもの姿にある。

それを知るには、園の子どもの様子を間近に見るのが一番の早道である。インドのマハトマ・ガンジーも、「子どもの家」を訪れたときに見た子どもの姿に心打たれ、インドにモンテッソーリ教育を導入することを決意したほどである。彼はその感動を次のように表現している。

「ここロンドンで彼女と彼女の子どもたちに会うことを待ち望んでいた。私にとっては、これらの子どもたちが静寂の徳へと導かれるのを見るのは、言葉にならないほどの喜びである。その香り高い平和の中で、子どもは教師によるほんの少しの誘いに応えて進む。そのリズミカルな動きを追うのは言葉にできないほどの喜びである。[注1]」（傍点筆者）

このように、ガンジーは「子どもの家」の子どもの姿を目の当たりにし、心打たれ、「言葉にできないほどの喜び」を感じている。そして、物事に集中して取り組む子どもの姿を「静寂の徳」と記している。

集中する子ども

さて『幼児の秘密』（一九三六年）には、モンテッソーリが発見した子どもの様子はどのように描かれているであろうか。それは、注意を集中する子どもの姿である。

「私が注意を引かれた最初の現象は、三歳ぐらいの一人の女の子が見せたものでした。それは〈円柱さし（はめこみ円柱）〉という教具を用いた練習で、円柱をブロック（角柱）にあけられている穴に入れたり出したりします。びんの栓を扱うのと似ています。しかし十本の円柱は大きさが段階的に異なっていて、一本一本がブロックの対応する場所に入るようになっています。

そのように小さい女の子が、強い興味を示して何回も何回も〈円柱さし〉の練習を繰り返すのを見て、私はびっくりしました。そのやり方が速くなったり上手になったりするわけではありませんでした。ある種絶え間ない動きがあるだけでした。私は検査するときの習慣で、練習の回数をかぞえ始めました。それから、私の目にしている不思議な集中がどの程度まで持ちこたえられるか試してみようと思いました。ほかの子どもたちすべてに、歌をうたわせたり動きまわらせたりするよう、教師に頼みました。実際に子どもたちはそうしました。女の子はまったく取り乱さずに、作業をつづけました。次にはその子の座っている肘かけ椅子ごと、そっとテーブルの上に置きました。女の子はすばやく教具をつかんで膝の上に置き、同じ作業をつづけました。女の子は、私がかぞえ始めてからでも、四十二回練習を繰り返しました。そして、夢から覚めたように練習をやめ、幸せな人のようにほほえみました。周りを見まわしたその目は、光りかがやいていました。」

「その女の子はまだほんの小さい子どもでした。その年齢では、注意力は不安定で捉えどころなくて、とどまることなくものからもの

へと移っていきます。それにもかかわらず、自我がいっさいの外部の刺激を受けつけないほど集中するという事実が起こったのでした。この集中には、精密で科学的に段階づけられた教具に関係するリズミカルな手の動きがともなっていました。」

「同じような出来事が繰り返し起こりました。集中したあと、子どもたちはその都度、元気を回復した、生命力にあふれた人間になりました。その様子は、大きな喜びを味わった人間のように見えました。[注2]」

集中する子どもには、生命力がよみがえり、幸せと喜びにあふれるというこの現象は、モンテッソーリ教育のカギとなるものであり、これを知っているといないでは子ども理解が大きく異なるような重要な発見である。注意の集中を繰り返すと、落ち着きのなかった子どもも変容し、落ち着き、知的好奇心が増し、社会性も生まれる。

集中する姿は、自ら選んだ内容を心ゆくまで繰り返すことができたときだけに現れ、大人の決めたスケジュールの中で、自分の興味・関心とは異なることをさせられている中では決して見られない姿である。

時間的な余裕、空間的な余裕、子どもが選んだ目標のある内容、子どもの心の尊重、保育者の理解などの条件がそろっていて初めて可能な、しかし、全世界で今この時も繰り返し確認され続けている子どもの奇跡的な姿、しかし、そのような環境では当たり前のように日常的に見られる姿なのである。

モンテッソーリは『幼児の秘密』のほか、『小学校における自己教育』（一九一六年）や『子どもの心―吸収する心』（一九四九年）など多くの著作の中でもこの姿を記している。

集中する子どもの姿について、脳神経科学の発展の成果を生かした分析もなされている。アメリカの神経学者K・ランバートは、モンテッソーリを「手の運動と関連のある脳回路の活性化に注目した先駆者として、心理学の

世界でもっと尊重されていい存在だと思う」と評価する。

ランバートは、本誌第一一四巻第四号でも紹介されたフロー理論をモンテッソーリに適用した。フロー理論とはアメリカの心理学者M・チクセントミハイが提唱するもので、好きな作業に没頭することで「『らくらくと川の流れ（フロー）に運ばれるような』快適な精神状態になることを発見した」ことからこの名が付いている。好きなこと、特にやりがいのある仕事をしていると、ほかのことは何も気にならなくなり、活動そのものが楽しく、最高の幸せを感じるというものである。

科学的に言うと、意欲をもって作業し満足感を得る運動の作用で、脳内の「側坐核という部位に快楽物質ドーパミンが放出され、快感を感じる」ということである。[注3]

われわれは、いろいろな目的で日々活動を行っている。日々の糧を得るため、名誉や評価を受けるためなどもあるだろう。しかし、活動それ自体が楽しくやりがいがあるとき、人は真の喜びにあふれるのである。

終わりに

本書は一九三六年に出版されたという意味では古典であるが、ここに描かれている子どもの姿は、条件がそろっていれば現在なお日々世界中で見いだされており、その意味で現在進行形の子どもの姿である。保育者や保護者が知り、子どもを尊重することにより、大人も子どもも幸せになれる真理が存在している。

注

1　P. Giovetti, Montessori, Mediterranee, 2009, p. 81.

2　マリア・モンテッソーリ『幼児の秘密』中村勇 訳　日本モンテッソーリ教育綜合研究所　二〇〇四年　pp. 140-141

3　ケリー・ランバート『うつは手仕事で治る！なぜ昔の人はうつにならなかったのか』木村博江 訳　飛鳥新社　二〇一一年　pp. 82-83

子ども学探訪

1……7……28

幼児の教育

アーカイブズとの対話④

56……109・110

ちょうど百年前の『幼児の教育』から
―第十六巻第四号（一九一六年四月号）―

構成／結城凛々
（編集委員会）

ちょうど百年前に発行された『幼児の教育』（当時の誌名は『婦人と子ども』）から二編、当時の保育実践の様子がうかがえる記事を紹介します（現代漢字、仮名遣いにしてあります）。

野口幽香（一八六六・一九五〇）は、東京女子師範学校で学んだ後、華族女学校附属幼稚園という富裕層の子どもが通う幼稚園で働きながら、貧しい子どものための幼稚園を森島峰と共に東京・四谷につくり（二葉幼稚園）、一日七～八時間の保育をしたことで有名です。当時は一般的でなかった卒業証書をこれら対照的な幼稚園で採用した体験と、その「結果」について報告されています。

幼稚園の卒業式

学習院教授　野口幽香

幼稚園の卒業証書は学習院の方では始めの中はしなかったのですが、近頃する事に致しました。さてして見ますと、大変にその結果がよいと云う事がわかって参りました。幼稚園というものが子供の記憶から消えないというよい結果を見る事が出来ました。大きくな

結城凛々（ゆうきりり）
保育研究者。毎日の保育を考えるために幼児教育の歴史を知ることが意外に近道だと感じ始めている。『幼児の教育』アーカイブズへの世界中からのアクセス数に驚いている。

ってから此の記念の証書を出して見て幼稚園を思い出す、たった一ひらの紙ですが、幼稚園と子供の生涯をつなぐ大変に価値のあるものになるのでした。

其後貧民幼稚園の方でも思いついて、証書をやる事に致しました。貧民の方ではもっと大切な事でありました。何年間此の幼稚園で保育を受けたという事が子供の一生に取って非常な喜びでありかつ其証書は将来職業を求むる上に於てもよほどの便宜を得る事になるのでした。証書の文句は学習院の方は別に面白いものでもありませんが、貧民の方は左の通り認めて居ります。

「右は二葉幼稚園に於て保育を受けたる事を証す　神を信じますます善良ならん事を祈る」

幼稚園としてはもちっと子供らしいよい詞がほしいのですが、今一寸考えつきませんから、教えて下さる人があるまでこのままにしておくつもりです。それから裏に園歌を記して、設立者二人の名を書きます。

子供が一番おしまいに幼稚園に来ました日に、学習院では花壇の苗を分配してやります。また前年の種を採集しておいた種類を分けてやる事もあります。柿の種やら椿、藤、蜜柑などありあわせを分配するのです。そして「今日帰ったら直に蒔いておおきなさい、あなた方が大きくなる時分に花が咲くから」と云いきかせますのです。一粒の種が毎年成長して花が咲き出した時分に、之を眺めて幾度か反復すれば、記憶がいつまでも新しくせらるるであろうと思ってで御座ります。かつ将来疲れた時には此花の下でやすめというつもりなのです。

貧民幼稚園の方では、卒業式には御馳走をします。赤飯をやります。それから動物園へつれて行く事にして居ります。弁当をこしらえて、電車を買い切ってつれて行きますのです。これは子供の大変な楽しみになって居り

ます。入学の当初からそんないたずらをすると動物園へ行かれないよと云って母親がたしなめて居るのをききました。そんなに印象を深くして居るのですから、其日の事は生涯忘れないでしょうと思って居ます。

写真は撮る事に致して居ります。始めは気がつかずに居りましたが此頃は毎年撮ります。貧民幼稚園の方のは値段を特別にやすく致しまして、平生からの積金で買わせて居ります。写真と証書を生涯の記念にしようと云うのであります。

次は、須子トミによる寄稿文です。福島市立幼稚園の保育者（当時は保姆）で、弊誌にはその文章が計三回掲載されています。ちょっと目立つ子どもと保育者との関係づくりのプロセスについて論じられています。

当時は、子ども一人で登降園するのが普通だったようです。付添いのおばあちゃんから子どもを引き離すときの保育者の姿はちょっと意外な面もありますが、遊びを通して周りの子どもたちとの関係づくりを促したり、その中で素直に態度を変化させる子どもの姿は今と変わりません。

附添人を離れぬ子供

福島幼稚園　須子トミ

或る幼児祖母に附添われて通園すること半歳、いくら置去らんとしてもきき入れません。祖母も亦置き去るにしのびぬ有様です。一体此子はなかなかのきかずもので、友達などとも角力などもする位の元気者なのです。併し附添だけは離れません。保姆も一人で来園する様にすすめますけれども、明日から一人で来ると申しては、又送られて附添われます。かくの如く幾日もくりかえしました。処が或

時祖母が便所に行きましたのを自分を置て家に帰りしものと思い、保姆の目をしのんで家ににげかえりました。これで一人で家にかえれるということが証明されました。或日祖母さんが保姆に向って申しますに、此子は来四月は小学校へ行かねばなりませんのにこれでは困ります。先生何とか工夫はありますまいかと。そこでこれはよい事を申されたと思い、あなたが此お子さんを全く私におあずけ下さって、私の為すがままにして下さるなら、必ず明日から一人で通園する様にして上げますと申しましたら、何卒先生におまかせいたしますからということでしたから、保姆は直に其子を一室につれて参り、あなたは先生を毎日毎日ばかにして居りますね。そんなに先生をだますとよい人になれませんよと怒り顔して申したら、あしたからはきっと一人で来ると申しました。それではおばあ様に今直ぐにかえって貰いましょうと、祖母の許に連れて参り、此お子さんはもはや一人で幼稚園に居られます。又明日から一人で来られますからおかえり下さいと申しましたら、祖母さんはそれではと一礼してかえられました。これは兼て打合わせて置いたのです。ところが彼の児は大声出しておばあさんとなき出しましたがそれでもかまわずに又元の一室に抱いて連れ参り、明日からはほんとうに一人で来ることを堅く堅く約束し保姆は顔をやわらげてこれから先生と汽車ごとしましょう、あなたは汽車の駅長さんだと此子の最も近き家から通園して居る友達四、五人と汽車ごっこを始めました。そして皆さん此駅長さんによくきいておのりなさいという風に、大にその子を尊重して遊ばせました処が、それから大元気となり、先生又あしたもしましょうね、あした私一人で来るなど申しました。此時の保姆の嬉しさ何に例えん。かくして遂に一人で通園する様になりました。

そこにいる子が子どもであるということ①

背伸びする赤ちゃんの指さす先には……

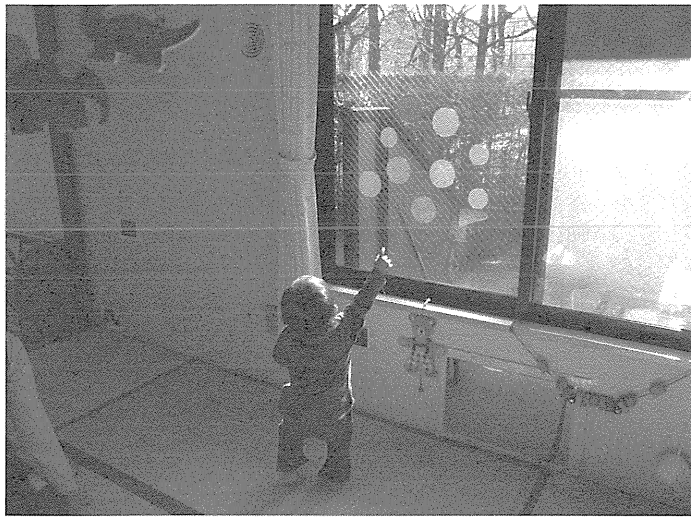
浜口順子
（大学教員）

大学という場所で、保育や幼児教育について授業をしたり研究したりするのが、私の仕事である。大学を卒業してかれこれ三十五年、講義で話す話題には事欠かないと言いたいところだが、正直なところ、講義室の前に立つと、「何も知らない」というぽっかりとした虚無感に襲われ、さて今日はどのように話をしていく自分になるだろう、と半ば不安、半ば開き直ったような気分になることが多い。その繰り返しである。

専門学校で非常勤講師をしていた三十年近く前のこと、夜間のクラスで、私はしっかり準備されたノートを読みながら授業をしていた。日中の仕事を終えてから学校に来る学生が多いので、うとうとしたり寝込んだりする者がいるのは仕方がないと思ったが、私語が多いのはさすがに周囲に迷惑だと思い、「こちらが話をしているのに聞かないのはおかしい」と注意をした。その時、教室の中央辺りで上体を机に横たえるようにしていた一人の学生が「そうかなあ」とつぶやいたのが耳に入った。その言葉が私の胸を突き、即座の応答はしないまま、どうにか授業を終えた。しかしその後、この言葉は私の講義に向かう気持ちを大きく変えさ

浜口順子（はまぐちじゅんこ）
お茶の水女子大学教授。本誌編集主幹。

せた。「聞け」と言わなくてはならない授業をするのはプロではない、学生が聞きたくなる授業をするのが先ではないかと。それまでの私は、時間が余ってももつように、ノートに話題を詰め込んで用意していた。機械的な、ノルマをこなすような話し方では相手が退屈することはわかりそうなものなのに、小中学校の授業ならともかく、大人の学生に対する授業なら「聞いてくれるのが当然」と思っていた自分の愚かさに気付いた。「そうかなあ」というつぶやきを聞いて、学生一人ひとりがそこに息づいて在ることを感じたのだと思う。私の視界をぱっと開かせてくれたその学生には感謝している。



天空を指さす子どもの姿

前置きが長くなったが、新しい講義の導入部で最近よく使う一枚の写真の話をしよう。これは、お茶の水女子大学内にある小さなナーサリーの保育士さんが撮ったものだ。乳児クラスのこの畳の部屋には、午前中、南向きの窓から日が差し込む。その中で、まだ歩き始めて間もない赤ちゃんが、光に向かって右手の人差し指を

突き立てている。この世に生を享け、ようやく垂直に身を立てられるようになって間もない赤ちゃんが、見事にその総身の四分の一ぐらいを占める重い頭を支えつつ、一心に光に向かう姿。左足のかかとが床から少し離れるほど、体中が明るみへと引っ張られている。窓上に見える幾つかの丸い影は、水色、ピンク、赤、黄色の透明のビニールシートを保育者が切り取って貼り付けたもので、窓から差し込む光に色のバリエーションを与えている。窓の外の街路樹の揺れる葉陰も赤ちゃんの目にはちらちらと映っているかもしれない。

A・ポルトマンは、人は、その誕生時の依存性の高さから考えれば、哺乳動物として一年早く生まれ過ぎてきており（生理的早産）、この最初期の寄る辺ない状況で過ごす一年間の経験こそが、社会性、文化性などの人間的特性の重要な根拠になっていると考えた。そうして、人は一歳の頃立ち上がり、歩き始め、言葉を話すようになるのだ。

この写真において、この子がまさしく「立つ」ことと「話す」ことのはざまで、キラキラと人間性を発揮しているのを目の当たりにする。寝返りが打てるようになり、地面の上を這い、水平移動をしながら世界を探索し押し広げてきた子が、重力という自然の抵抗を征服して、垂直に立つ。そして今や、日の光を視線の向こうに真っすぐに感受している。

立つことで自由になった腕や手は、人に物を作り出す能力を与え、さらにはシンボリックな表現を自在にする力ももたらした。「指さし」は発語の前兆行動であると行動学や心理学は教えている。犬などは、人が「あっちに行きなさい」と指さしをしても、ただ指先を見ているだけである。類人猿は「これが欲しい」という意味での指さしをするが、自分の興味の対象を他者に知らせるための指さしはしないし、その意味も解さないという（M・トマセロ）。

一茶の句「名月をとってくれろと泣く子かな」が思い浮かぶが、その子も、まん丸として皓皓（こうこう）と天空に浮かぶ月を見、ある圧倒的な印象を受けて腕を伸ばしたのではないか。なぜ泣いたかは知る由もないが、「月が欲しい」というような即物的な欲求は超越していたのかもしれず、その感動は伝わらないまま自分の必死さをただ愛でてほほ笑むばかりの大人に対してむずかったのだと考えられなくもない。赤ん坊の写真をよく見ると、その左下の方に、その子を見守る保育者の腕が写っている。指さしは安心の源たる保育者の存在を背後に感じての行動である。赤ちゃんは「見て見て」と言わんばかりに指を空中に突き立て、保育者は同じ方を見上げながら温かく受容していたのではないか。

子どもがいる、子どもとして在る

古代から「真・善・美」などと人間の普遍的価値は抽象されてきた。しかし、この子が光の中で体験していたものは、「美しさ」だけではなかろう。その感受性の基盤にある安心感という「善さ」でもあり、自然の恵みや豊かさという「真実」の感受でもあったのではないか。これらが渾然一体とした経験は、この子の生き生きしさという在り方に表現され、われわれを感動させる。津守真は「赤ん坊が高みの光へと向ける目、それを感動をもって見る大人の目の中に高尚な精神を育てる土壌がある。」と言った（『幼児の教育』第一〇五巻第三号 p.55）。そこに子どもが「いる」ということは、当たり前のことになりやすい。しかし、同時に子どもとして「在る」という見方を重ね合わせるときに、見える世界はぱっと変わっていく。

書評

「雛」の心性 ―『雛の誕生』を読んで

森下みさ子
（大学教員）

「雛（ひな）」の誕生への問い

和らいだ日差しの下、桃の小枝を手にした少女たちが走り寄ってくる。「さあさあ、どうぞ、あがって、あがって」と声を掛ける少女の手にも桃の枝が握られている。屋内では、幼い女の子や少女や女性たちが何やら楽しそうにおしゃべりの花を咲かせている。奥まった台の上には、三対のお雛様が、小さなお膳を前にすまして座している。なんてほのぼのと幸せそうな光景だろう。『雛の誕生』と題されたこの本を手にした人は、まずは「雛節供」（『江戸繁昌絵巻』）に描き出された、幸福の縮図のような表紙に迎え入れられる。と同時に、毎年春の兆しとともに飾るわが家のお雛様を思い浮かべる人も、幼い頃口ずさんでいた「雛祭り」の歌を思い出す人もいるだろう。あれ、そういえば、表紙のお雛様は段飾りになっていない、と不思議に思う人もいるかもしれない。本を開いてみれば、口絵からして、お雛様とは似て非なる人形の写真も載っており、ごく当たり前に祝ってきた「雛」の由来がにわかに謎めいて、ふっと問いが湧き起こる。「お雛様、あなたたちはいったいどこからやって来たの？」

その問いに、極めて真摯に向き合ったのが、

森下みさ子（もりしたみさこ）
白百合女子大学児童文化学科教授。「児童文化」「おもちゃ論」等担当。
単著に『江戸の微意識』（新曜社）、『江戸の花嫁』（中央公論社）、『娘たちの江戸』（筑摩書房）、『おもちゃ革命』（岩波書店）がある。

この大部な本、皆川美恵子著『雛の誕生―雛節供に込められた対の豊穣』(春風社　二〇一五年)である。クイズの答えのような、手品の種明かしのような謎解きなら、もっと簡便な本にまとめられもしただろう。けれど、長らく児童文化史や女性史の研究に携わり、毎年各地の雛を見に足を運んできた著者は、当時の史料に忠実にあたり、そこから想像し得る事を地道に重ねることを自らの使命のように選び取って、謎解きに向かった。結果として、絡まっていることさえ意識されてこなかった「雛」の謎玉が、少しずつ解きほぐされていったのである。

ここで指摘しておきたいのは、著者が明らかにしたのは「雛」という物の歴史ではないということだ。物だけの変化ならもっとわかりやすい単線で描くこともできるかもしれない。が、著者が史料から想像を広げて捉えようとするのは、往時の人々が「雛(の前姿)」をどのように扱っていたか、そこに宿る「心」のさま、すなわち「心性」とも言えるものである。

目からウロコ

さて、雛に宿る心性を解き明かす細やかな手さばきは、残念ながら本書を読み進めることで味わっていただくしかない。日記、随筆、史書、禁令に至るまで、史料に刻まれた「雛」に関する言葉を丁寧にすくい取って読み解いているからだ。ただしその手さばきは、歴史の専門家にしかわからないような難しいものではなく、「紹介」という形で易しく説かれていることを付け加えておこう。

ここでは、謎が解きほぐされて明らかになった「目からウロコ」の史実の断片のみ伝えるほかない。例えば、人形には人の身代わりとなる「ひとがた」と、愛らしく調えられた「ひひな」の二つの流れがあるが、その両方にかかわって(先述の口絵の)「あまがつ」という人形がいること。「天児」という字を当て

ることもある「あまがつ」は、公家社会において幼児の守護を任された幼児専用の人形（ひとがた）として男児にも贈られていたという。一方で、『源氏物語』の若紫が弄ぶように人形の衣裳を調え動かして遊ぶ「ひひな」があり、着せ替え人形に興じる女児の遊びの本性に合わせるかのように、女児の生育祝いとして（まだ結婚の予祝とは言えない形の）雛節供が催されていた。注目に値するのは、子ども用に小ぶりに作られた祝儀の道具を、なんと小さな「御使い人形」が届けていることである。著者がたびたび記すように、身代わりや守護の意味を超えて、人形が醸し出す小さな世界をこそ愛しんで遊ぶ「ミニアチュール」の志向がほの見える。このほほ笑ましい祝儀が「雛満（ひいなみて）」と称して十三歳をもって閉じられるところにも、女児特有の遊びの園が人形と共に囲われ守られていることが感じられる。もちろん現在の私たちの感覚を当てはめて解する危険は避けねばならないが、著者の同性としての共感が、女児の生育を守り祝す方法のあれこれを細やかにすくい取り引き寄せる手法につながったことは間違いない。

人形に仮託される小さな世界は、江戸時代に入ると、少女の生育儀礼という囲い地を出て、武家や町人の女性たちが春の訪れとともに祝う、女性たちの祭りへと移っていく。その道筋に大きくかかわるのが、高価な婚礼道具を細部にわたって摸した雛道具である。姫君の婚礼をミニアチュール化した雛道具が、結婚をより晴れがましいものにしたのがうかがえる。と同時に、「ひとがた」をしのばせる紙細工の立雛の姿は薄れ、高価な衣裳や冠で調えられた内裏雛が主役となって、雛道具と共に飾られるようになる。著者が言うように、江戸時代においては、結婚の「晴れやかな目出度さ」が重んじられ、自分たちにはあり得ない高貴な結婚を模した内裏雛が「その虚構性ゆえに、女性たちが血筋に関係なく越えてゆく結婚のための呪具」となったのだろう。

さらなる謎解きへ

女性たちの思いを託された内裏雛が据えられて雛文化が誕生するところまでたどれば、この本の目的は果たされたと言える。が、実は複雑であるが故によりいっそうスリリングなのは、雛の誕生とともに退いていく「あまがつ」と、よく混同される「ほうこ（這子）」との関係を読み解いた箇所である。

口絵にもあるように竹の胴体を持つ「ハンガー式」の「あまがつ」は、高貴な赤ん坊の災厄を引き受ける身代わりとして用いられ、やがて悪霊から姫君を守護する代行人形（嫁の偽装をさせた身代わり）の重責を果たすようになる。これとよく混同されるのが「ぬいぐるみ式」の「ほうこ」であり、これもやはり新生児の傍らに置かれるが、嫁入りに同伴した後は雛段にも飾られ、やがてこれに衣裳が着せられて愛玩人形へと移行していく。背景には、有職故実を説く伊勢流と、小笠原流の流れをひく水嶋流との、生育・婚礼儀礼に関する解釈の違いもせめぎ合っているようだ。

いずれにしても、作法指南書の文言にまで目を届かせることにより「あまがつ」と「ほうこ」の使い分けの実相が浮かび上がってくる経緯は、謎解きの醍醐味を遺憾なく発揮している。とはいえ、これらの人形の謎が解き明かされたわけではない。おそらく、「人形」が「ひとがた」から「にんぎょう」へと移行していく道筋ともかかわって、謎はまだまだ解かれるのを待っているに違いない。本書は、さらなる謎解きの旅へと誘う声に満ちているのだ。

「雛」という愛らしくほほ笑ましい対の人形に託された思いをすくい取る柔らかい感性と、史料の難解な言葉から史実を読み取る深い視力は、本来は相いれることが難しい。それが、「雛」を愛しみ「歴史」を愛する著者のひたむきな努力によって結実したのが、この一冊であると言えるだろう。

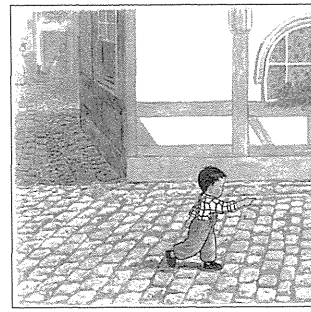
論考

絵本の中で育つ子ども

永倉みゆき
（大学教員）

絵本の中に子どもならではの姿が描かれていると、よく育った子どもを見つけたようなうれしい気持ちになります。そんな子どもたちを一人一人紹介していきたいと思います。

まずは『ぼくはあるいた まっすぐまっすぐ』[注1]の「ぼく」に登場してもらいましょう。表紙に描かれた、はだしで誇り高く立っているこの子は三歳になったばかりというところでしょうか。物語の始め、おばあちゃんから電話がかかってきます。この子はここで二つの予測を持つことになります。つまり、題名にある通り「家の前の〝いなかみち〟をまっすぐまっすぐ歩くとおばあちゃんの家に着く」という予測と、「おばあちゃんの家かどうかは中をのぞいて確かめるとわかる」という予測。この誇り高い三歳児は、「まっすぐ」という大事な事を忘れないように指さしながらひたすら進んでいきます。



▲『ぼくはあるいた まっすぐまっすぐ』から

しかし、歩きだしてすぐにこの子は道から外れた草むらに入ってしまいます（なぜなら大人の言う「まっすぐ」は道なりに進むという

永倉みゆき（ながくらみゆき）
静岡県立大学短期大学部こども学科教授。
絵本そのものも好きですが、絵本と子どもがかかわることでさらなる面白さが生まれるように感じています。

ことだからです。道はカーブしていました)。何だか歩きにくい道だなと思うこともなく、「まっすぐ行ったらおばあちゃんの家があるはず」という自分の見通しを疑うこともなく、この子はまっすぐまっすぐ進んでいきます。

このまっすぐな道はなかなか面白い道で、赤い花が咲いていたり、チョウの大群と出会ったり、おいしい実(ワイルドストロベリーでしょうか)をポケットに入れたりと、さながら小さな冒険旅行のようです。その中でも一番の難題は、川にぶつかったこと。実は、ここの絵を見ると、ほんの少し目を左に向ければ、小さな丸木橋が架かっていて、ぬれずに向こう岸に渡れるのですが、この子は「まっすぐ進む」という自分のやり方を守り通して(ぬれないように今までの経験から靴を脱ぎ、ズボンの裾をまくって)川を渡っていきます。そしてほら、ちゃんと渡れました。なんていい考え! あの橋が「そうそう、坊やは坊やのやり方でいいんだよ」と言って見送っているようにも見えてきます。

▲『ぼくはあるいた まっすぐ まっすぐ』から

この後にも、男の子の行く手を阻む難題は次々と降りかかってくるのですが、男の子はひるむことなくそれらの課題を自己流に解決していきます。例えば、登るのに大変そうな高い山にぶつかったときは(これにしてもちょっと回り道をすれば登らずに済むのに)、なんと後ろ向きに登って「高い」ということをわからないようにするという奥の手を使って登っていきます。よく、怖いものに出会った子どもが、目を固くつぶって目の前の現実を消してしまうように、「見えなければ大丈夫」という子どもらしい知恵なんですね。この自己流に解決するところに意味があるのでしょう。

そうやってようやくたどり着いた家は、どう見てもおばあちゃんの家らしくない(それ

もそのはず、それは馬小屋ですから)。しかし「まっすぐ行ったらおばあちゃんの家」「わからなければ、のぞいてみればわかるはず」との自身の見通しを確かめるべくしっかりのぞいた男の子は、大きな馬の顔にびっくり仰天。その次はなんと犬の家。これもよく考えれば違うとすぐ気付くはずですが、律義にのぞく男の子。もちろん、そこにいたのは犬。そしてついには蜂にも追いかけられて、最後に行き着いたのは、つるバラが外壁に這う素敵な家。読者には、優しげなおばあちゃんの姿がもう見えています。ようやくお目当てのおばあちゃんの家に着きました。最後のページには、大きなチョコレートケーキを前に、摘んできた大きなイチゴの実を誇らしげに渡す男の子の姿があり、裏表紙には口の周りをケーキのくずだらけにしておいしいおいしいチョコレートケーキをほおばるところが描かれています。最後に作者はこの子に何と言わせたと思いますか?「おばあちゃんの おうち やっぱり まっすぐだった」ですって。これを読んだ私は「うーん」とうなってしまいました。これはただの「ある勇敢な子どもの冒険譚」ではなく、どの子もが通る成長の話だったのです。

野村庄吾著『乳幼児の世界』[注2]に次のような文があります。「このような自分が出はじめた三歳児は、主体的に『自らが行く』誇り高き騎士ですから、外から抑制したり、やろうとしている鼻先を禁止したり、手伝ったりして自尊心を傷つけるようなやり方をされると、かえって聞きわけがなく駄々っ子のようになってしまいます。」(「美しき三歳」)。子ども、特に三歳くらいの子どもには、「自分はいつも正しいことをやっている」「僕ってちゃんとやっていける」という有能感が必要ですし、それを守り育てていくのが大人の役目だと思います。そうだとすると、男の子をちょっとした冒険に誘い、やり遂げて自信がついたところでおいしいごちそうでねぎらうおばあちゃん

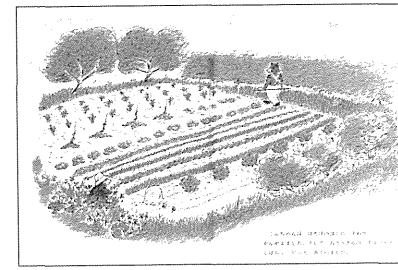
は、なんて素晴らしい保育者なのでしょうか。

＊　＊　＊

保育者といえば、この人の育て方も素敵です。『くんちゃんのはたけしごと』[注3]の熊のお父さん。子熊のくんちゃんは、自分のできることをいろいろやってみたい盛り。年頃でいったら、先程の「ぼく」と同じ三歳くらいでしょうか。物語は、クッキーを取るため引き出しを足掛かりに戸棚によじ登り、降りるときに失敗してバケツに転落して床を水浸しにしたシーンから始まります。この頃の子どもは、自分の目的があると何とかしてそれを達成するために知恵を絞りますが、大概その方法は大人にとっては有難くないものなのです。かの有名な「おさるのジョージ」君も、『ろけっとこざる』[注4]の話の中で、手紙を書くためにペンにインクを入れようとしてインクをこぼし、こぼしたインクを何とかしようと粉石けんを掛けてホースで水を掛け、部屋が水浸しになるといった場面がありました。やろうとしていることは正しいのに、少々方法が合わなかったために大変な結末になってしまうのが、この年頃の子どもの常なのでしょうね。このくんちゃんがバケツに落ちたところを見て、横で拭き掃除をしていたお母さんはちょっと驚いた表情をしますが、悪気なく邪魔をしてくれる息子を叱りもせず、「外へ行ってお父さんの畑仕事のお手伝いでもしたら？」なんて優しい提案をして体よく夫に育児を押しつけるあたりは、なかなかの夫使い上手と言えます。一方、このやりたがり坊やを託されたこのお父さんも、普段からなかなかのイクメンと見えて、くんちゃんのお手伝いを快く受け入れてくれます。このやりとりを見ていると、やっぱり大人のチームワークがあってこそ、子育ての大変な時期が乗り越えられるというものだという気がしてきます。

さて、お父さんの畑仕事を手伝えることになったくんちゃんは、早速熊手を取り上げて、畑をならすまねを始めます。ところがそこは

今まさにお父さんが種をまいたところだということで失敗、失敗。そんなことにめげもせず、次にはお父さんのやったようにジョウロで水をやるくんちゃん。ところがくんちゃんが水を掛けたのは雑草だったので、これもまた失敗。「雑草は抜くものだ。ほら、こうやって」と言われたくんちゃんが、それではと草を抜けば、今度は「違う、違う！」「おまえが抜いているのは花じゃないか」と言われる始末。それから後も、くんちゃんがやることなすことは、ことごとくお父さんから「違う、違う！」と言われてしまいます。いったい幾つ失敗を繰り返したことでしょうか（六回もなんですよ）。しまいにはさすがのくんちゃんも……お手伝いをめげて放り出してしまったのでしょうか。いいえ、そうではありません。くんちゃんは、ようやくそこで〝立ち止まって考え〟たんです。それまでは〝やるやる〟とすぐに飛びついて手伝っていたくんちゃんが、初めてお父さんのすることをじっと見るのです。くんちゃんとお父さんのアップで描かれていた今までの絵と違い、ここでは少し引いた絵になっていて、くんちゃんの小ささと、畑仕事が行われていた広い世界が対比されます。ようやく、くんちゃんは、やりたいことだけを見る点的視点でなく、全体を見る視点を持つのです。そして、どうやったらよいか、自分なりに考えます。じっくりと、しっかりと。子どもがぐんと育つときには、こんな時間が流れるのかもしれません。



▲『くんちゃんのはたけしごと』から

しっかりお父さんのやり方を見たくんちゃんは、もう間違えません。そして手際よく畑仕事の手伝いを終えたとき、お父さんからこう声を掛けられます。「それでいい。なかなかうまいじゃないか」。それを聞いたくんちゃん

の誇らしそうな顔といったら。

お父さんは、「さっきよりうまくなったな」なんて以前と比較して褒めたりはしません。しっかりその子の〝いま〟だけと向き合い、評価してくれるのです。私たち大人は、このくんちゃんのお父さんほどに、子どもが常に新しい自分である〝いま〟と向かい合おうとしているでしょうか。「いまある自分」の先に「ありたい自分」「なりたい自分」を持つことが子どもの育ちであるのであれば、その可能性も含めて褒めることが大人の大切な役目ではないでしょうか。ここにも私は保育の重要な視点を見る思いがします。

＊　＊　＊

くんちゃんと、『ぼくはあるいた……』の「ぼく」はちょっとタイプが違います。くんちゃんのように何事にもすぐに飛びつき、考えるよりも前に実行している子どもが、どのクラスにも一人くらいはいるのではないでしょうか。一方で、「ぼく」のように静かではあるけれど意志は固く、思い込んだらどこまでもやるタイプの子どももいそうですね。日常の保育とは違ってこんな絵本の中で出会うと、どちらの子も年齢相応によく育っているものだと感心してしまいます。

現実の保育を振り返るばかりでなく、時には絵本の中でいろいろな子どもについて考えてみると、違う発見があるのかもしれません。

▲『ぼくはあるいた まっすぐまっすぐ』から

参考文献

1　マーガレット・ワイズ・ブラウン作／坪井郁美 文／林明子 絵『ぼくはあるいた まっすぐまっすぐ』ペンギン社　一九八四年

2　野村庄吾『乳幼児の世界 ―こころの発達―』岩波書店　一九八〇年

3　ドロシー・マリノ作／間崎ルリ子訳『くんちゃんのはたけしごと』ペンギン社　一九八三年

4　H・A・レイ作／光吉夏弥訳『ろけっとこざる』岩波書店　一九九八年

論考

保育のクロスロード　保育は素敵な物語（2）
走り続けるとも君

湯澤美紀
（大学教員）

「保育は素敵な物語」。今回は、その二回目のお話です。

五歳のとも君（仮名）は、自閉症スペクトラムの症状をもっていました。乗り物が大好きで、電車の図鑑を開いては、うっとりと写真を眺めます。しかし、いざ走り始めると、動きも素早く、あっという間にスタートダッシュし、辺りを駆け巡ります。そんなとも君の一年を追った私。それから三年。とあるクラスで一人の女の子に出会いました。

走るの大好き

私は、ある研究を通して、とも君と出会いました。「特別な支援を必要とする子どもたちが、いかにして健やかに育っていくことができるのであろうか」。この問いを立て研究をスタートするにあたり、仲間と議論を重ねる中で、「子ども一人ひとりを理解できる先生」の保育から学ぶことが大切ではないかという結論に至ったのでした。そこで私は、三人の園長先生に協力を求めました。「先生方が出会った保育者の中で、この人はという方がおられ

湯澤美紀（ゆざわみき）
ノートルダム清心女子大学。専門：保育学・発達心理学・幼稚園教育実習担当。

たら教えてください」。すると、三人の先生の口から、一人の先生の名前が挙がりました。森山先生でした。早速、森山先生の園の園長先生に、研究の趣旨をお伝えしました。園長先生はすぐにご快諾くださりました。そして森山先生は、「私でいいんですか？」と躊躇されつつも、「お役に立てるかどうか」と、お受けくださいました。

とも君は、森山先生の五歳児クラスの男の子です。すでに自閉症スペクトラムの診断を受け、療育にも通っていました。

観察初日の朝、一人の男の子が私の目の前に飛び込んできました。とも君です。一直線に保育室に小走りでやって来ます。そして、カバンを勢いよく机に置き、一瞬立ち止まると、帽子をかぶって、園庭に飛び出していきました。まるでハチドリのような勢いです。おそらく、登園時、すでに園庭でかけっこが始まっていたのを横目で見ていたのでしょう。勢いもそのままに遊びの輪に飛び込んでいきました。

とも君はとにかく走ることが大好きです。しかし、勢い余って、みんなとは違うルールになってしまうこともありました。

園では、運動会が終わってからも、リレー遊びが子どもたちの遊びの中に引き継がれていました。二つのチームに分かれ、それぞれがバトンを持ち、スタートします。とも君は走り出し、一周してスタート地点に戻ってきます。次の子どもがバトンを渡されるのを今か今かと待っていますが、とも君はバトンと共にさっそうと駆け抜け、さらに走り続けるということもしょっちゅうでした。とも君のもつ、活動の切り替えの難しさといった特徴は、いろいろな遊びの中にも顔を出します。しかし、どんな時も、森山先生は、とも君の気持ちを受けとめる保育を行っていました。

先生のまなざし

森山先生の声は、澄んでいて清らかです。声掛けも、子どもの耳に届くちょうどよい大きさで届けられます。組活動の時間、子どもたちは自由遊びの活動を終えて、保育室に戻ってきます。子どもたちは集まり、出席確認をした後、歌を歌ったり、その日の活動をしたりします。とも君は、目の前の遊びを終えてクラス一斉の活動に入ることに時間がかかります。

ある日のことです。その日、とも君は、クラスの隣の部屋の環境としてあったピザ作りのコーナーに夢中でした。紙皿にペンでピザのトッピングを描いていきます。組活動の時間が来ました。しかし、とも君は、クラスに戻る気配はありません。森山先生が何度か様子を見に来ます。しかし、とも君は、紙皿から目をそらしません。森山先生は、とも君に近づき、とも君の体を両手でそっと包みます。

「とも君、あと何枚ピザを作ったら、お部屋に帰ってくる？」

優しい声で尋ねます。最初、とも君はその質問が耳に入らなかったようですが、もう一度、ゆっくり森山先生が尋ねました。

「よん！　よん！」

そう言うと、とも君は、紙皿の方に目を再び向けました。

「わかった。待ってるね」

森山先生は、私に目配せをして、クラスに戻っていきました。私もうなずき返しました。

それからのとも君の動きのさらに速かったこと。紙皿にペンでグルグルグル～と渦を描いて、隣に重ねていきます。一枚、二枚、三枚。すぐに三枚を描き終わりました。私は、「次の四枚目で終わることができるかな？」と思いながら見守っていました。すると、とも君は、四枚目の紙皿を手に取ると、先程ま

での動きにブレーキがかかったかのように、お皿をじっと見つめた後、端にゆっくりと置きました。そして、すばやくその下の紙皿を取り、またペンでグルグル描き始めます。そして、それから二枚、計五枚を描き終えたところで、森山先生が再びやって来ました。森山先生の姿に気付くと、とも君は走ってクラスに戻っていきました。保育室の中から、「おかえりなさ〜い」という子どもたちの声が返ってきました。

私は、森山先生にあのことを伝えなければと思いました。確かにとも君の方法は違ったけれども、とも君は、森山先生との約束は守っていたのです。そのことをお伝えすると、森山先生は、にこっと笑われて一言。

「うん。わかってました。きっとどこかで私との約束は守ってくれているって」

そして次の瞬間、「かっわいいよね〜」と、さらにこぼれる笑顔で語られました。

クラスの仲間

森山先生の、一人ひとりの子どもたちへの信頼に基づいたクラスづくりは、しっかりとクラス全体に浸透していました。

ある組活動での一こまです。その日は、二クラス合同で、ルール遊びを行うことになっていました。遊戯室の中央に、大きな線を縦に端から端まで引きます。子どもたちは四つのグループに分かれます。二グループが、左右の壁に一列にそれぞれ並び、合図とともに、中央まで駆け寄ります。そして、中央でペアの友達を見つけて、じゃんけんをします。負けたら、自分の壁側に走って逃げます。勝ったら、相手を追いかけます。逃げたほうが、つかまらずに壁まで逃げ切ったら勝ち、というゲームです。残りの二グループは、遊んでいる子どもたちを見て楽しみます。

私は遊戯室の端に立ちながら、「これは、と

も君には苦手な遊びかもしれない」と思っていました。走りたい気持ちが先に立ったら、途中で立ち止まってじゃんけんをするといった切り替えは、とも君には難しいでしょう。やはり、そうでした。とも君は、スタートすると、そのまま向こうの壁まで突進していきました。ペアになるはずの子は、中央の線で立ち尽くしています。そして、誰もいなくなると、スタートラインまで戻ってきました。もう一回しましたが、同じことでした。とも君は、ルールを逸脱しています。「他の子どもはどう思うんだろうか?」と、私の気持ちは少しザワつきました。すると、私の隣で遊びの様子を見ていたクラスの女の子二人が、こそこそ耳打ちをしています。

「もしかして……」と、私は勝手に、あるシナリオを予想していました。しかし、うれしい方向で予想は裏切られました。

「ねえ、見て。とも君って走るの早いじゃん」

「そうだよね。すごいよね」

もちろん、とも君のペアの子に対する配慮は求められるところだと思います。しかし、ここで、ルールを逸脱しているとも君をルールの枠だけで捉えるのではなく、とも君のもっている本来の持ち味を認めている女の子たちの姿に、森山先生の真のクラスづくりを教えてもらった気がしました。

今も走っている

私は、三年後の春に、その園を訪ねていました。にぎやかな朝の情景です。私は、なぜか真っすぐ、一つのクラスに向かいました。そして、絵を描いていた二人の女の子に、

「何を描いているの?」

と、声を掛け、お話を始めました。すると、不思議なことに、とも君の思い出が次々と頭に浮かんできます。以前にも、園自体には訪

れていました。しかし、こうして保育室に足を踏み入れるのは、あれ以来、初めてのことでした。「だからかな」。そう思っていました。

森山先生はもう他の幼稚園に異動されていました。しかし、何人かの先生は当時からそのままおられます。その中のお一人が、保育室にいる私に気付いて声を掛けてくれました。

「今、先生がお話しされていた女の子は、とも君の妹ですよ」

そう言われてみれば、どこか面影があります。だから、とも君のことを思い出していたのです。でも、不思議なものです。私がその日、初めて声を掛けた子どもが、とも君の妹だったなんて。

すると、女の子のクラス担任の先生が再び声を掛けてくださいました。

「とも君、元気なようですよ。今は毎日、学校から帰ってきたら近くのグラウンドの外周を走っているんですって。初めの頃は、ジョギングに行ったまま帰り道がわからなくなってしまうということもあったらしく、お母さんも自転車でついていたようですが、今は、一人で走って家に帰ってくるらしいです。近々、子ども向けのマラソン大会に出場することになっているのだそうです。それに向けての練習の日々だそうですよ」

「とも君は、今も走っているんだ」

三年分成長したとも君の姿を想像しながら、森山先生の保育はここに生きていると感じた瞬間でした。子どもを信じ、子どものありのままの素晴らしさを認める保育は、時を経て、子どもの良さをさらに伸ばし続けているのです。

子ども学のひろば

『お茶大子ども学ブックレット』バックナンバーのご案内

お茶の水女子大学「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」（ECCELL）事業では、研究活動の一環として「子ども学シンポジウム」「お茶大保育フォーラム」等を開催し、その記録を『お茶大子ども学ブックレット』という冊子にまとめ、発行しています。バックナンバーの購入をご希望の方は、お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所事務局ブックレット担当：nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jpまで、メールでご連絡ください。一冊 500 円（送料別途負担）にて郵送させていただきます。なお、在庫が無くなり次第、販売終了となります。

Vol.1（2012 年 9 月発行）
『子育て力の危機と創生～エンパワーメントの視点から～』（牧野カツコ氏、星美和子氏）
Vol.2（2013 年 3 月発行）
『今、子どもが育つ環境を考えるⅠ～「ナージャの村」本橋監督をお迎えして～』
（本橋成一氏、小玉亮子氏、榊原洋一氏）
Vol.3（2014 年 3 月発行）
『絵本の挿絵について』（黒井健氏）
Vol.4（2014 年 9 月発行）
『これからを生きる子どもたちへ～津守眞氏からのメッセージ～』（津守眞氏、高橋洋代氏）
Vol.5（2015 年 3 月発行）
『日本の保育現場における“遊び”の意味』
（榊原洋一氏、河邉貴子氏）
Vol.6（2015 年 12 月発行）
『鼎談「子ども・戦争・歴史」』
（本田和子氏、宮澤康人氏、山本秀行氏）
Vol.7（2015 年 8 月発行）
『認定こども園の今とこれから』
（渡辺英則氏、無藤隆氏）

※「Vol.6」と「Vol.7」は発行年月が前後しています。

本の紹介
『大人になるっておもしろい?』清水真砂子著 岩波ジュニア新書　2015 年

「ひとりでいるっていけないこと？」「けんかってそんなにいけないこと？」「質問するってめんどくさい？」「動かないでいるって、そんなにダメなこと？」……目次には、そんな問いかけが並ぶ。そして著者は、若い友人Ｋに語る言葉として「明るすぎる渋谷の街で考えたこと」の章の中で例えばこんなことを言う。「悩んでいいのです。はぐらかさず、とことん悩んでください。悲しんでください。ただし自己憐憫ではなく、他者のために悲しんでください。」と。また、本のタイトルである問いには、「うん、だんぜん!!　でも焦らないで。現在をていねいに生きてほしい。」と答え、独り居の時間も大切なこと、本を読む、ということが支えになったと語る。著者の言葉は決して耳障りの良い、飲み込みやすい言葉ではない。そこが良さだ。こんな言葉を、若者たちに送ってくれる人がいることに感謝したい。（KT）

DVD の紹介
『世界の果ての通学路』（監督：パスカル・プリッソン 2012 年 フランス）　販売元：角川書店 2015 年

ケニア、アルゼンチン、モロッコ、インドに住む子どもたちの通学のさまを追ったドキュメンタリー。一部に、映像のために日常を再現してもらったシーンもあるそうだが、基本的には、その子たちのごく日常的な通学の光景が映し出されていることには変わりはない。スクリーンいっぱいの風景の「広さ」、道の果てしなさに、ただただ圧倒される。「よくもまあ、こんな険しく長い道のりを」と、言葉を無くし、涙が出てくる。しかしそれは決して、つらかろうとか、かわいそう、という気持ちからではなく、むしろ、もう絶対この人たちにはかなわない、という、畏怖に近い憧憬だと思う。砂にまみれていても、登場する子どもたちは皆ほんとうに美しい。そして、気高い。大人たちもまた。（KT）

編集後記

出版界はどこも厳しい状況で、明治３４年創刊の『婦人と子ども』から『幼児教育』『幼児の教育』と名前を変えながら続いてきている本誌も例外ではなく、存亡の危機に直面しております。そのような状況の中、１１５年目の春号を皆様にお届けすることができ、ひとまずホッとしております。

「子ども」という存在を起点とする教育・保育の在り方を問い続けることが本誌の使命だと考え、これまで「問い直そう、保育の中のあたりまえのこと」「保育現場で気になるコトバ考」という特集を組み、身近な日常の問題を取り上げ、そこから保育の在り方を問い直してきました。

その流れは、春号にも継承されています。春号の特集テーマは「安心」。子どもに限らず、人が生きていく上で「安心」はなくてはならないものです。しかし、「子どもたちが子どもらしく安心して生活できること」は、当たり前ではなくなってきています。

子どもの心の中に「安心だ」という思いが確かに根付くには、子ども・保育者・保護者の三者の信頼関係を築いていく努力が必要だということ。そうした努力の上で、「今ある自分」でいることが十分認められ、その先の「なりたい自分」になっていく（永倉氏）ところまでを含めて見守ること、自分から高みを見上げそこに近づいていく子どもたちの姿（浜口）を信じていくこと。子どもと接する上で大事なことが今号には貫かれているように感じました。「四季の子ども」（川田氏）の「赤い金魚」のエピソードも通じるものがあり、この先の展開が楽しみです。

『幼児の教育』の存続を支えるのは読者の皆様です。今後ますます充実した誌面を目指していきます。youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jpまで、ご感想・ご意見等、どうかよろしくお願いいたします。(I)

次号予告　幼児の教育 夏号　2016年6月刊行予定

新企画、新連載が好評！　充実した内容でお届けします。

特　　集　保育現場で気になるコトバ考 10
－「葛藤」とは……？ －　加藤繁美氏ほか

リポート　こども園をつくる
～ お茶の水女子大学こども園からの報告 ～

報　　告　中央アフリカ ガボンの保育から
～ JICA（青年海外協力隊）に参加して ～　西垣友惠氏　※タイトル・内容が変更になる場合もあります。

幼児の教育 春号　第115巻　第2号

平成28年4月1日発行
編集発行人／浜口順子
編集担当／田中恭子
発行所／日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発売所／株式会社フレーベル館
電話:03-5395-6604（編集）
振替／00190-2-19640
印刷所／図書印刷株式会社
定価／本体834円+税

編集委員／伊集院理子
菊地知子
佐藤寛子
灰谷知子
編集協力／フレーベル館

©日本幼稚園協会 2016 Printed in Japan

● ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613（営業）●

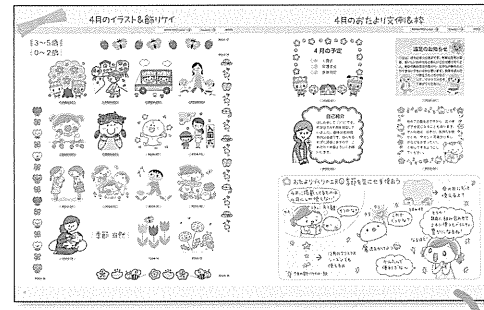
好評発売中

保育のいろんなシーンで使える

イラストカット&おたより文例

CD-ROM付 for windows

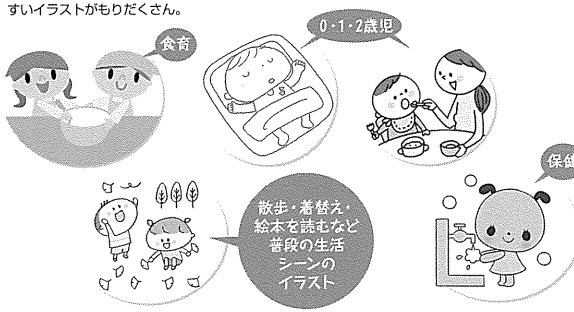
日々のおたよりづくりをもっと楽しく！
文例付きで簡単に使えるイラストカット集。
おたよりづくりをちょっとの工夫で楽しめるコツや、イラストをおたよりだけでなく、壁面や行事のプログラムなど、保育のいろんなシーンで使えるアイデアなど、コラムも充実！



池田かえる／コラム執筆
定価1,998円（税込）
26×21cm 128ページ CD-ROM付き
ISBN978-4-577-81390-4 109-60

point1 要望の多いイラストがいっぱい

季節や行事のイラストに加え、おたよりでよく使う食育・保健のイラストや、要望の多い普段の生活シーンのイラスト、また保育現場でますます必要とされている0・1・2歳のイラストなど、使いやすいイラストがもりだくさん。



point2 コラムも充実！

イラストカットにちょっとした工夫をプラスして、ぬくもりやオリジナリティを感じられるおたよりにするには？

イラストカットをおたよりだけでなく、保育のいろんなシーンで活用するアイデアは？

保護者と子どもが、楽しみながら見てくれるおたよりのアイデアって？

おたよりづくりやイラストカットの活用が、もっと楽しくなるコラムが13本！

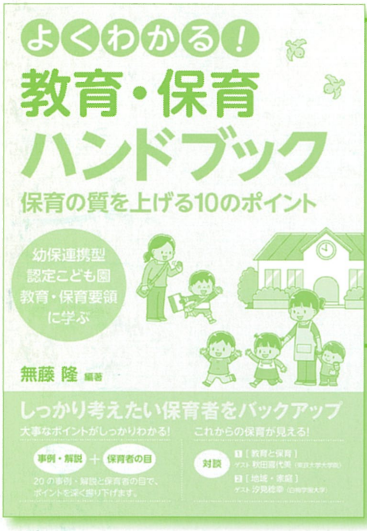
キンダーブックのフレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所
または本社保育営業部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第一一五巻　第二号　平成二十八年四月一日発行

最新刊

イラストも豊富でよみやすい！
明日の保育を見つめなおすためのヒント満載。



ISBN978-4-577-81389-8

よくわかる！
教育・保育
ハンドブック

幼保連携型認定こども園教育・保育要領に学ぶ
保育の質を上げる10のポイント

編著：無藤 隆
定価1,728円（税込）　21×15cm　144ページ

これからの教育・保育を考える際、保育の質向上のためにおさえておきたい10のポイントを切り口として、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』を読み解きます。『教育・保育要領』のフレーベル館版解説書。

本書の特長

「10のポイント」事例と解説で、目の前の保育が見える！

ポイント説明／事例と解説／保育者の目で理解が深まる！

★気鋭の研究者がわかりやすく、ていねいに紹介します。

執筆者（50音順）
大豆生田啓友先生（玉川大学）
古賀松香先生（京都教育大学）
松嵜洋子先生（千葉大学）
矢藤誠慈郎先生（岡崎女子大学）
和田美香先生（聖心女子専門学校）

対談で、これからが見える！

保育者が、これから考えるべきことが見えてくる！

★無藤隆先生を対談のホスト役とし、ゲストをお迎えして、注目のテーマについてお話をうかがいます。

ゲスト：秋田喜代美先生（東京大学大学院 教授）
テーマ：「教育と保育」
古くて新しい、奥行きのあるテーマである「教育と保育」。園や保育者は、今後、どんな点に着目すべきなのでしょうか。

ゲスト：汐見稔幸先生（白梅学園大学 学長）
テーマ：「地域・家庭」
これからの園に求められる役割に、「地域・家庭」へのかかわりがあります。どんなことがポイントになるのでしょうか。

定価　本体八三四円＋税

キンダーブックの フレーベル館
くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所
または本社保育営業部（03）5395-6608にお問い合わせください。